

H I E

# 比 恵 遺 跡 群 28

— 比恵遺跡群第13次・15次・21次調査 —

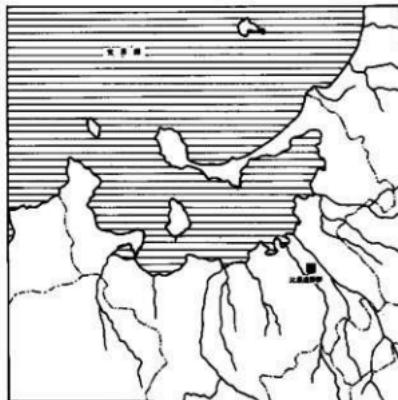
1999

福岡市教育委員会

HI E

# 比恵遺跡群 28

— 比恵遺跡群第13次・15次・21次調査 —



遺跡名	遺跡略号	調査略号
比恵遺跡群第13次	HIE-13	8617
比恵遺跡群第15次	HIE-15	8636
比恵遺跡群第21次	HIE-21	8863

1999

福岡市教育委員会

## 序

九州北部、玄界灘に面する福岡市には豊かな自然と歴史的遺産が多く残されています。この地は海峡を隔てて大陸に近い地理的条件により、古くから発展してきました。しかし近年福岡市は都市化が進展し、それらの保全に影響が現れました。

福岡市教育委員会ではさまざまな開発によって影響を受ける文化財について事前の調査を行い、保存策につとめています。

本書は福岡市博多区に所在する比恵遺跡群の発掘調査報告書です。調査では弥生時代から古代に及ぶ造構や遺物が出土しました。特に弥生時代の溝や建物は奴国中枢部の大規模な集落を示し、また古墳時代の大型建物群は都津官家などの国家的施設の可能性が示されました。何れもこの地域の歴史や文化を語る上で重要な手がかりとなるものと考えられます。

本書が文化財保護への認識と理解を深める一助となり、また研究の一助として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に当たり数々の御協力を賜った関係機関、各位に心から謝意を表する次第です。

1999年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 町田英俊

## 例言

- 1、本書は博多区駅南地区における民間開発に伴い、福岡市教育委員会が1986年におこなった埋蔵文化財の事前調査の報告書である。
- 2、本書使用の造構実測図は、山口譲治、吉留秀敏、松田訓祀、李弘錦、李永植、城戸泰利、上方高弘が作成した。
- 3、本書使用の遺物実測図は、吉留秀敏、城戸康利、森部順子が作成した。
- 4、本書使用の写真は山口譲治、吉留秀敏が撮影した。
- 5、本書使用の図面の製図は吉留秀敏がおこなった。
- 6、本書使用の方位は磁北である。
- 7、造構の表記はSDは溝、SBは掘立柱建物を示す。
- 8、本書の執筆と編集は吉留秀敏がおこなった。
- 9、本書に関する図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される。より詳細な資料、情報が必要な場合は利用していただきたい。

## 本文目次

第1章 はじめに	1
1、調査に至る経過	1
2、調査経過と組織	1
3、比恵遺跡群の位置と環境	2
第2章 第1・3次調査の報告	3
1) 発掘調査の概要	3
2) 地層	3
3) 検出遺構	4
1.井戸	4
2.溝	6
3.掘立柱建物	7
4.その他	10
4) 小結	10
第3章 第1・5次調査の報告	11
1) 発掘調査の概要	11
2) 地層	11
3) 検出遺構	12
1.井戸	12
2.溝	12
3.掘立柱建物	17
4.その他	30
4) 小結	32
第4章 第2・1次調査の報告	33
1) 発掘調査の概要	33
2) 検出遺構	34
1.竪穴式住居	34
2.掘立柱建物	34
3.溝	36
4.その他	36
4) 小結	36
第5章 まとめ	37
1) 比恵遺跡群弥生時代中期後半の人溝について	37
2) 比恵遺跡群古墳時代後期の官衙的遺構について	38

## 挿図目次

Fig.1	比恵遺跡群と周辺地形 (1/10万)	1
Fig.2	比恵遺跡群と調査地点 (1/400)	2
Fig.3	比恵遺跡第13次調査区の周辺 (1/1,000)	3
Fig.4	比恵遺跡群第13次調査区全体図 (1/200)	4
Fig.5	井戸SE016・101遺構図 (1/50)	5
Fig.6	溝SD205土層図 (1/20)	5
Fig.7	井戸SE016・101出土遺物 (1/2,1/4)	5
Fig.8	溝SD205出土遺物 (1/2,1/4)	6
Fig.9	掘立柱建物SB201、220 (1/60)	7
Fig.10	掘立柱建物SB101、構列SA102 (1/100)	8
Fig.11	柱穴内出土遺物 (1/2,1/4)	9
Fig.12	比恵遺跡群15・21次調査区全体図 (1/200)	11
Fig.13	比恵遺跡群15・21次調査区基本土層模式図 (横1/600, 縦1/150)	12
Fig.14	井戸SE10,11実測図 (1/40)	13
Fig.15	井戸SE10出土遺物 (1/4)	13
Fig.16	井戸SE11出土遺物 (1/4)	14
Fig.17	溝土層断面図 (1/40)	15
Fig.18	溝SD05c遺物・杭列出土状況 (1/60)	16
Fig.19	掘立柱建物SB12～SB14実測図 (1/60)	17
Fig.20	溝SD05c出土遺物1 (1/4)	18
Fig.21	溝SD05c出土遺物2 (1/4)	19
Fig.22	溝SD05c出土遺物3 (1/4)	20
Fig.23	溝SD05c出土遺物4 (1/6)	21
Fig.24	溝SD05c出土遺物5 (1/4)	22
Fig.25	溝SD05c出土遺物6 (1/4)	23
Fig.26	溝SD05c出土遺物7 (1/4)	24
Fig.27	溝SD05c出土遺物8 (1/4)	25
Fig.28	溝SD05c出土遺物9 (1/4)	26
Fig.29	溝SD05c出土遺物10 (1/4)	27
Fig.30	溝SD05c出土遺物11 (1/2,1/4)	28
Fig.31	溝SD05c出土遺物12 (1/4)	29
Fig.32	溝SD05a、SD05b出土遺物 (1/2,1/4)	30
Fig.33	溝SD01、SD02、SD09出土遺物 (1/4)	31
Fig.34	比恵遺跡群21次調査区全体図 (1/100)	33
Fig.35	掘立柱建物SB15実測図 (1/60)	34
Fig.36	21次調査区出土遺物1 (1/2,1/4)	35
Fig.37	21次調査区出土遺物2 (1/4)	36
Fig.38	比恵遺跡群における人溝の位置 (1/1,000)	37
Fig.39	比恵遺跡群58次調査の「大溝」引き込み部 (『561集』)	38

## 挿図目次

PL.1

- 1.13次調査地点調査前風景（西より）  
2.13次調査地点東側（1区）全景（南東より）

PL.2

- 1.13次調査地点建物SB101、柵列SA102検出状況  
(南東より)

- 2.13次調査地点西側（2区）全景（南東より）

PL.3

- 1.13次調査地点井戸SE016完掘状況（北西より）  
2.13次調査地点溝SD205土層断面（東から）  
3.13次調査地点柵列SA102全景（南から）

PL.4

- 1.13次調査地点SB201柱穴064上層断面（西から）  
2.13次調査地点SB201柱穴074土層断面（西から）  
3.13次調査地点SB201柱穴086土層断面（西から）  
4.13次調査地点SB101柱穴140十層断面（北西から）  
5.13次調査地点SA102柱穴033土層断面（北から）  
6.13次調査地点SA102柱穴(47+)層断面（北から）  
7.13次調査地点SA102柱穴060土層断面（北から）  
8.13次調査地点SA102柱穴114土層断面（北から）

PL.5

- 1.15次調査地点遠景（北東より）  
2.15次調査地点近景（北東より）

PL.6

- 1.15次調査地点建物SB12検出状況（北から）  
2.15次調査地点建物SB14検出状況（南から）  
3.15次調査地点建物SB13検出状況（南から）

PL.7

- 1.15次調査地点井戸SE11遺物出土状況（北から）  
2.15次調査地点井戸SE11完掘状況（北から）  
3.15次調査地点井戸SE10完掘状況（西から）

PL.8

- 1.15次調査地点溝SD01完掘状況（北から）  
2.15次調査地点溝SD02完掘状況（北から）  
3.15次調査地点溝SD02～SD04完掘状況（北から）  
4.15次調査地点溝SD06・SD07完掘状況（北から）

PL.9

- 1.15次調査地点溝SD05完掘状況（南から）  
2.15次調査地点溝SD05完掘状況（北から）  
3.15次調査地点溝SD05上層断面（北から）  
4.15次調査地点溝SD05遺物出土状況（東から）  
5.15次調査地点溝SD05遺物出土状況（東から）

PL.10

- 1.15次調査地点溝SD05調査風景（西から）  
2.15次調査地点溝SD09土層断面（東から）

## 13次調査

遺跡調査番号	8 6 1 7		遺跡略号	H I E - 1 3
調査地地帯	福岡市博多区博多駅南4丁目159-3			
開発面積	6 6 1 m <sup>2</sup>	調査対象面積	6 6 1 m <sup>2</sup>	調査面積
調査期間	1986年7月16日～9月17日		分布地図番号	3 7 - 0 1 2 7

## 15次調査

遺跡調査番号	8 6 3 6		遺跡略号	H I E - 1 5
調査地地帯	福岡市博多区博多駅南6丁目9-6			
開発面積	5 5 8 m <sup>2</sup>	調査対象面積	5 5 8 m <sup>2</sup>	調査面積
調査期間	1986年8月5日～9月27日		分布地図番号	3 7 - 0 1 2 7

## 21次調査

遺跡調査番号	8 8 6 3		遺跡略号	H I E - 2 1
調査地地帯	福岡市博多区博多駅南6丁目9-6			
開発面積	5 5 8 m <sup>2</sup>	調査対象面積	5 5 8 m <sup>2</sup>	調査面積
調査期間	1989年3月8日～3月29日		分布地図番号	3 7 - 0 1 2 7

# 第1章 はじめに

## 1、調査に至る経過

福岡市早良区博多駅南地区に所在する比恵遺跡群は、近年の都市化に伴い建物などの開発が盛んに行われている。福岡市教育委員会では開発に先立って試掘調査を実施し、各地点の状況を把握し、遺跡保存のために地権者との協議を重ね、遺跡保存のための協力をお願いしている。しかし、遺跡の保存が困難な際は、地権者との協議、契約を整え、記録保存のための発掘調査を実施している。

1986年の第13・15次調査地点、1989年の第21次調査地点の発掘調査は、再開発の計画を受け前述の行程を踏まえて発掘調査をおこなったものである。

## 2、調査経過と組織

発掘調査は当初試掘調査の成果を受けて、第13次調査地点を1986年7月16日～同年9月17日に開始した。また第15次調査は1986年8月5日～9月27日に発掘調査した。なお、当初第15次調査対象範囲であった558m<sup>2</sup>のうち、西側の168m<sup>2</sup>分については既存の店舗付き住宅の解体が遅れ、改めて1989年3月8日～3月29日に別途発掘調査を実施した。調査年度が異なるためにこれを第21次調査とした。

調査に際しては以下の体制を組織したが、相次ぐ緊急調査で十分なる体制がとれなかった。しかし、関係各位の多大な協力によりその進行が無事進められたことを明示しておきたい。

調査委託者である田中康子氏、松尾隆氏、さらに福岡放送株式会社をはじめとする関係各位の協力があった。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋

蔵文化財課第2係

教育長 佐藤善郎（当時）、

町田英俊（現）

部長 河野清一（当時）、

平塚克則（現）

課長 柳田純孝（当時）、

荒巻輝勝（現）

第2係長 飛高憲雄（当時）、

山口謙治（現）

調査庶務：松延好文

試掘調査：山崎純男（文化財主事）、

杉山富雄、小林義彦

調査担当：山口謙治、吉留秀敏

調査・整理補助：松田嗣紀（現愛知県埋

蔵文化財センター）、李弘鐘（九州大学大学院）、

太田睦（九州大学）、野村俊之（別府大学）、

李永楨（早稲田大学大学院）、城戸泰利、

上方高弘、池ノ上宏、板坂和宏、中村清治、

安河内敏幸、岡元昇一・川野主史（福岡大学）

）、三塙美由紀（西南学院大学）



Fig.1 比恵遺跡群と周辺地形 (1/10万)

整理作業：立石真二、尾崎君枝、甲斐田嘉子、丸井節子、官坂環、木村良子、森部順子

### 3、比恵遺跡群の位置と環境

比恵遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置している。遺跡は平野中央を北流する那珂川、御笠川によって挟まれた、標高8~5mほどの更新世丘陵上にある。

現在、この地域は市街化が進み、平坦な地形となっているが、これは1930年代に行われた区画整理事業による結果である。本来は多くの開拓谷があり、より複雑な地形を呈していたと見られる。

この遺跡では、旧石器時代~縄文時代後期の遺物は少量出土しているが、明確な遺跡として確認されていない。遺構を作った遺跡は縄文時代晚期後半（弥生時代早期）からである。弥生時代中期前半までは数ヶ所に集落があり、同中期中頃に台地上全城に集落が拡大する。これ以後、古墳時代初頭まで福岡平野の最大の拠点集落として発展する。古墳時代前半期に集落は一旦途絶えるが、同後期になると再び大規模な集落となる。集落の一部には横列とともに大型建物が現れ、日本書紀に記される「那津宮家」の可能性が指摘されている。古代から中世まで集落は残るが、その中心は南側の那珂遺跡群に移るとみられる。

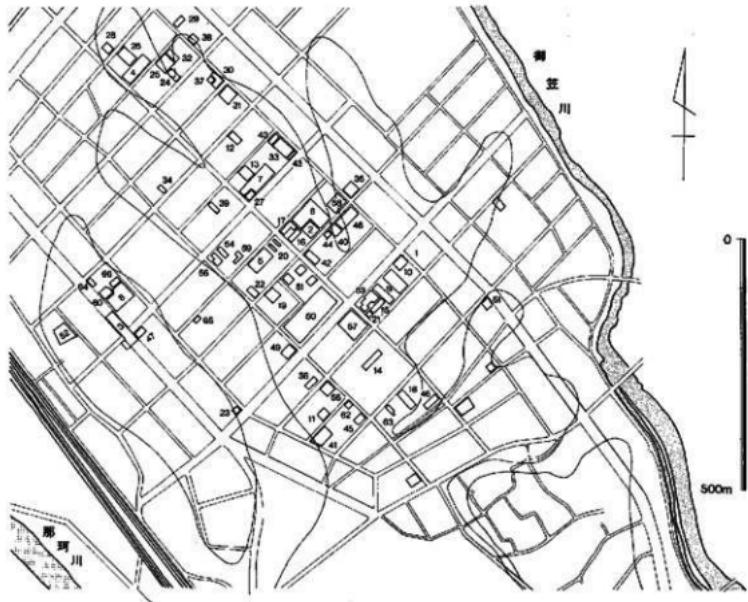


Fig.2 比恵遺跡群と調査地点 (1/400)

## 第2章 第13次調査の報告

### 1) 発掘調査の概要

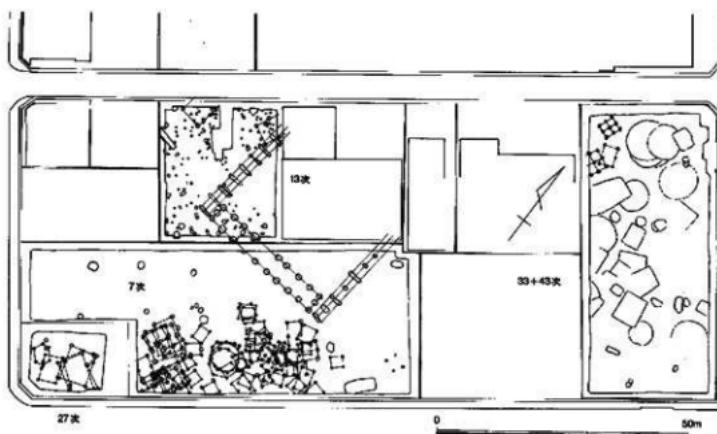
第13次調査地点は、比恵遺跡群の南半にあり。丘陵の中央付近に位置する。現在の標高は約6mであるが、これは昭和初期以降の削平による地下げの結果であり、基盤地層の状況から見て本来の標高は7m強であったと考えられる。

調査は住宅建設に伴うものであり、北側を道路に面した南北約27.5m、東西約24mの範囲661m<sup>2</sup>が調査対象となった。なお、調査に際しては調査区隣地が建物、ブロック塀等であったため、安全確保のため敷地境界より約1mの未掘区を残した。そのため実際の調査面積は504m<sup>2</sup>であった。発掘調査は堆土の外部搬出が困難であったために、敷地内で堆土を移動して作業を進めた。当初東から南にかけての2/3程度を調査し（1区）、その調査終了後に堆土を移動し北西側の1/3を調査した（2区）。

なお、1区調査中に欄列を伴う大型建物の一部が発見された。これについては新聞報道がなされ、関係者から隣地の既調査の7次地点遺構と連続した施設であり、「那津官家」の関連施設の可能性も指摘された（Fig.3）。福岡市教育委員会と原因者をふくめた遺構保存の協議がなされたが、代替え地確保の困難から保存は困難との判断がだった。発掘調査は期間延長を経て9月17日に終了した。

### 2) 地層

本調査地点の地層は、既に幾度かの削平のために自然堆積をおおきく失っている。近年の擾乱を免



れた場所でも地表から下位へ造成土、旧畠地耕作土と続き、その直下が不整合で鳥栖ローム層中～下半となっている。本来の自然層はこの鳥栖ロームより上部に鳥栖ローム上部、新期ローム（レス層）、黒色クロボク層（Ah火山灰含）、腐植土（地表）と続き約1m強の堆積が予測される。本調査ではこの鳥栖ローム検出面を地山とし、遺構検出を行った。検出された遺構はすべてこの地山上で確認されたものである。

### 3) 検出遺構 (Fig.4)

調査の結果、井戸跡2基、掘立柱建物3基、構列群1、溝1条、柱穴多数が検出された。

#### 1. 井戸 (Fig.5・7)

SE016 調査区南側にあり、掘立柱建物SB101と重複して検出された。平面はほぼ円形であり、径約0.9m、深さ約1.0mを測る。いわゆる八女粘土層には達せず、床面には凹凸がある。床面直上で小形丸底甌の胸部片が出土した (18)。

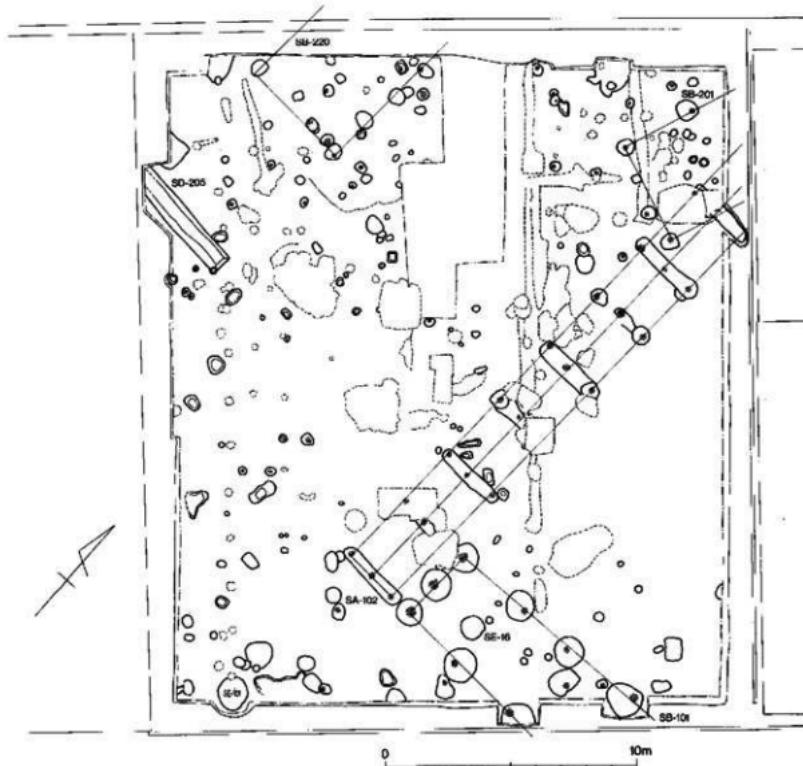


Fig.4 比恵遺跡群第13次調査地点全体図 (1/200)

SE101 調査区南西側で検出した。平面はおよそ南北に長い梢円形を呈し、南北1.4m、東西1.2m、深さ約2.0mを測る。底面はほぼ平坦であり、八女粘土層節理面まで掘られている。節理面は西側に抉れ、オーバーハンプしている。井戸内からは完形土器類は出土せず、土器片(1~15)、投弾(16・17)、砥石片が散漫に出土した。土器には甕、壺、高坏がある。このうち10~12・15は弥生時代中期後半、1~7・9~13は後期前半、8・14は後期末~古墳初頃に位置付けられる。本遺構は後期~古墳初の時期に比定される。

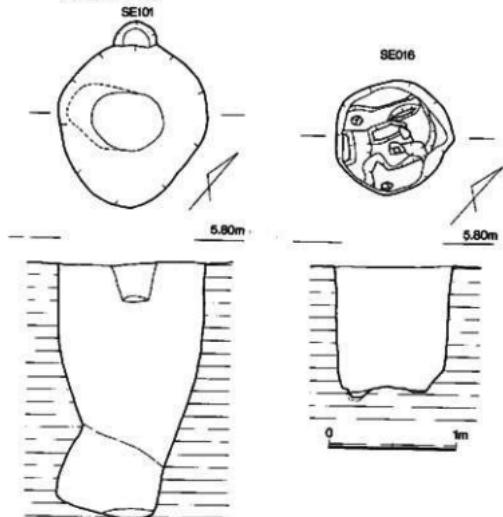


Fig.5 井戸SE016、101遺構図 (1/50)



Fig.6 溝SD205土層図 (1/20)

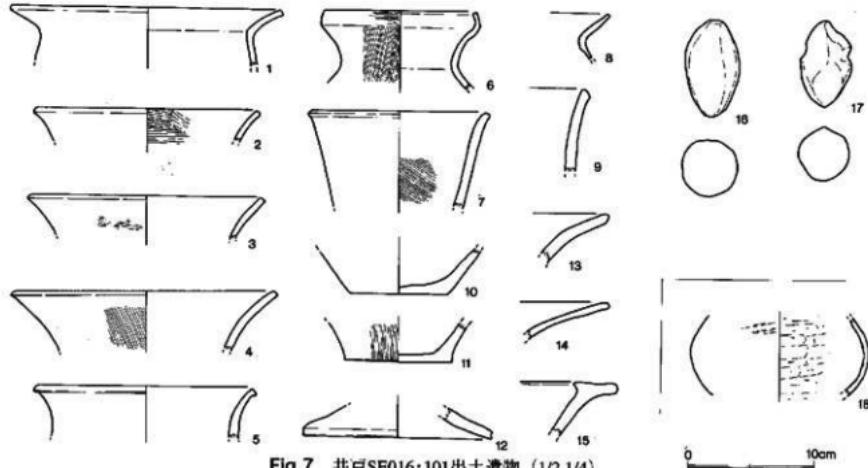


Fig.7 井戸SE016・101出土遺物 (1/2, 1/4)

2.溝(Fig.6・8)

SD205 調査区内に端を発し、西へ長さmで区外へ展開する。幅約0.9m、深さ約0.5mを測る。溝は企画性があり、直線で両側は並行、端部は直角に掘られている。溝の主軸はN-85°-Wを測る。溝内埋土は腐植土と地山二次堆積物の混在層の再堆積から成る。埋上中位を中心に土器類や石器が出土した。土器類には壺、壺、鉢、高杯などがある。時期は弥生時代中期後半、同後期中頃、終末期に区分される。本遺構は弥生時代終末期の時期に比定される。

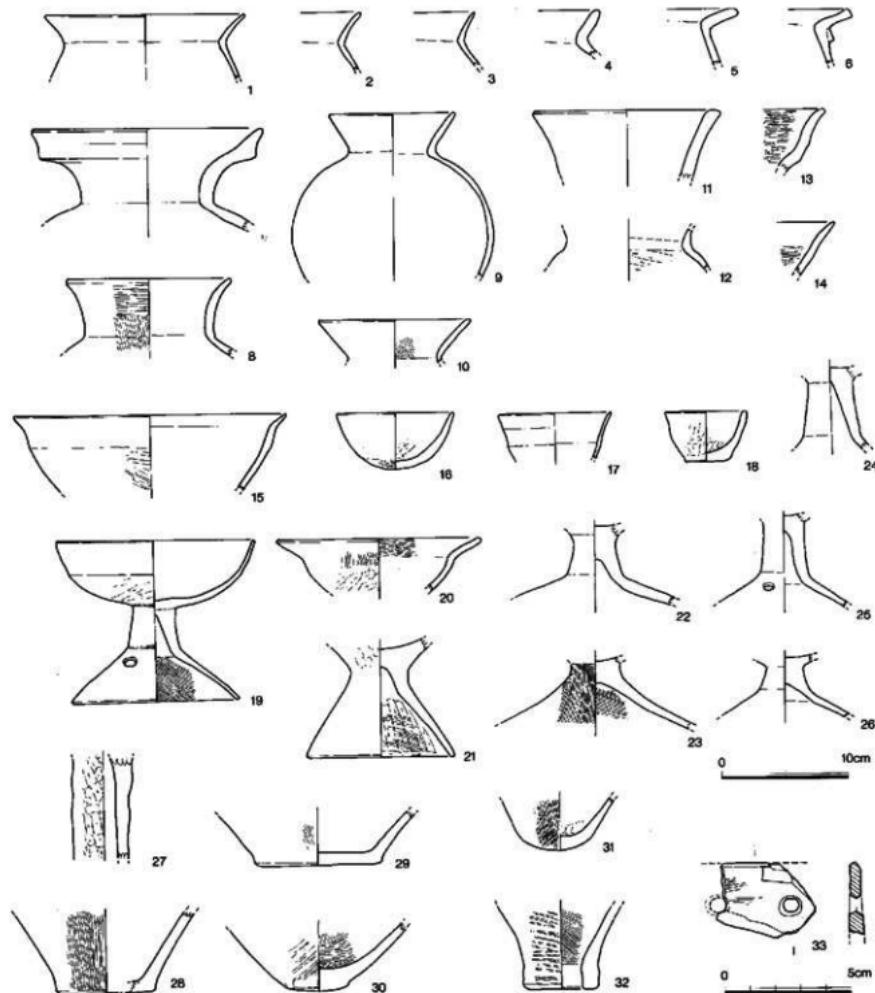


Fig.8 溝SD205出土遺物 (1/2,1/4)

## 3.掘立柱建物(Fig.9~11)、柵列(Fig.10)

**SB201** 調査区北東端にある。1×1間もしくはそれ以上の規模であり、N-26°-E、桁行4.0~4.1m、梁行3.0mを測る。柱掘り方はすべて不整な隅丸長方形を呈し、およそ0.6×0.7mを平均とする。柱穴床は平坦であり、構築堆土と柱痕が観察できる。柱痕は径0.2~0.25mを測る。柱掘り方内から少量の弥生時代土器片が出土したが、図化できるものはない。

**SB220** 調査区北側で検出した。1×3間以上の南北棟である。N-06°-E、桁行4.8m以上で柱間は1.6m前後、梁行4.5mを測る。柱掘り方は梢円形であり、0.5~0.7mの大きさである。東側の掘り方列には掘り直し跡がみられる。柱痕は2基に観察され、何れも直徑0.2mを測る。柱掘り方から少量の弥生時代土器片が出土した。は弥生時代後期の器台口縁部である。

**SB101** 調査区南側にある。2×3間以上の東西棟である。7次調査におけるSB02と連続し、2×9間の大型建物に復元される。主軸はN-88°-Wであり、柱筋はほぼ通る。桁行は26.6mで柱間は2.2m、2.7m、3.2mとばらつきが著しい。梁行は西端が3.1m、7次の東端が3.4mと差がある。また西側の梁間は1.4mと1.6mを測る。柱掘り方は円形から不整梢円形であり、径1.0~1.3mを測る。柱痕跡が残り、径0.3m前後である。柱掘り方や柱痕内から多くの上器片(1~6、8~20)、鐵錐(7)が出土した。土器片には弥生時代中期後半のもの(10・13・16・17~19)、同後期前~中頃のもの(1・2・14)、同後期後半から古墳時代前期のもの(2~6・8・9・11・15)がある。1点ではあるが、柱穴P-140の柱痕から須恵器甕片(20)が出土した。

**SA102** 調査区中央から東側調査区外に延びる。3列7間以上の柵列である。SB101の西端に近接し、端面で両者の柱筋を備えている。柵列は東西に3.0m前後、幅0.5~0.8mの布掘りに3本1組の柱を据えた掘り方が、8列検出された。柱痕の主軸はN-2.3-Eを測る。布掘り内の3本の柱間は1.0~1.2mである。南北方向の柱間は2.5~3.1mとばらつきが大きい。布掘り内に再掘削の跡があり、柱痕は径0.2m前後である。掘り方内から弥生時代後期から古墳時代初頭(21~25)の上器片が出土した。

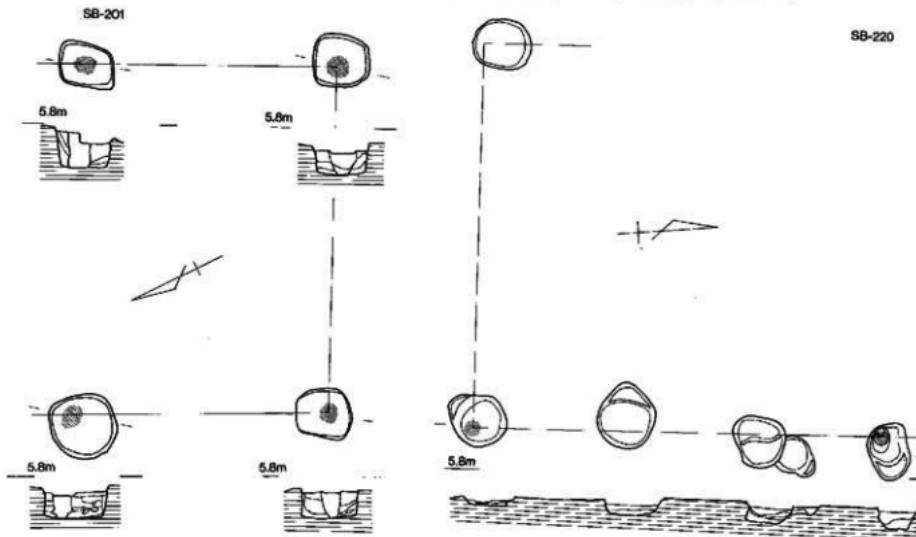


Fig.9 掘立柱建物SB201、220(縮尺1/60)

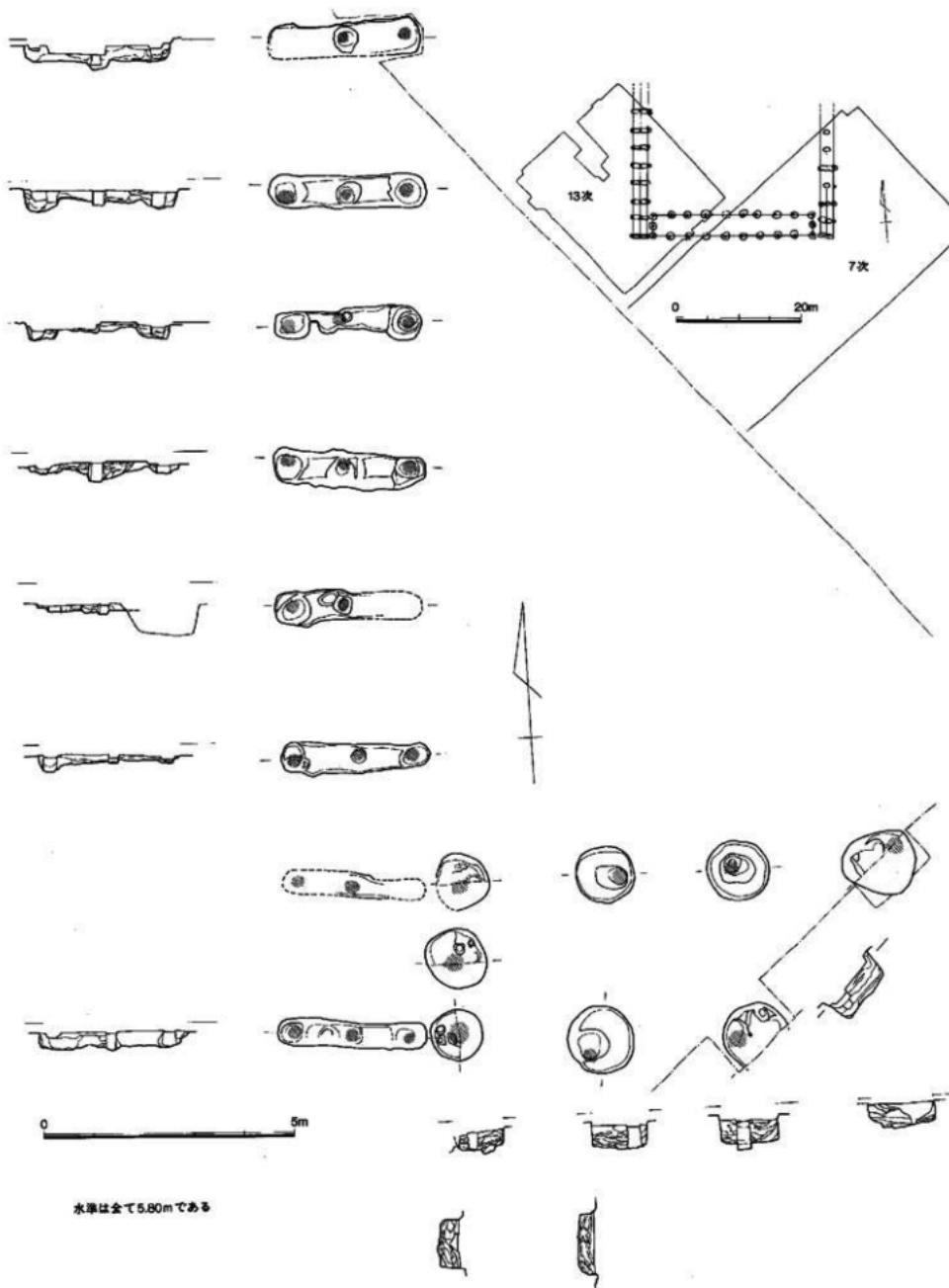


Fig.10 据立柱建物SB101、橋列SA102(1/100)

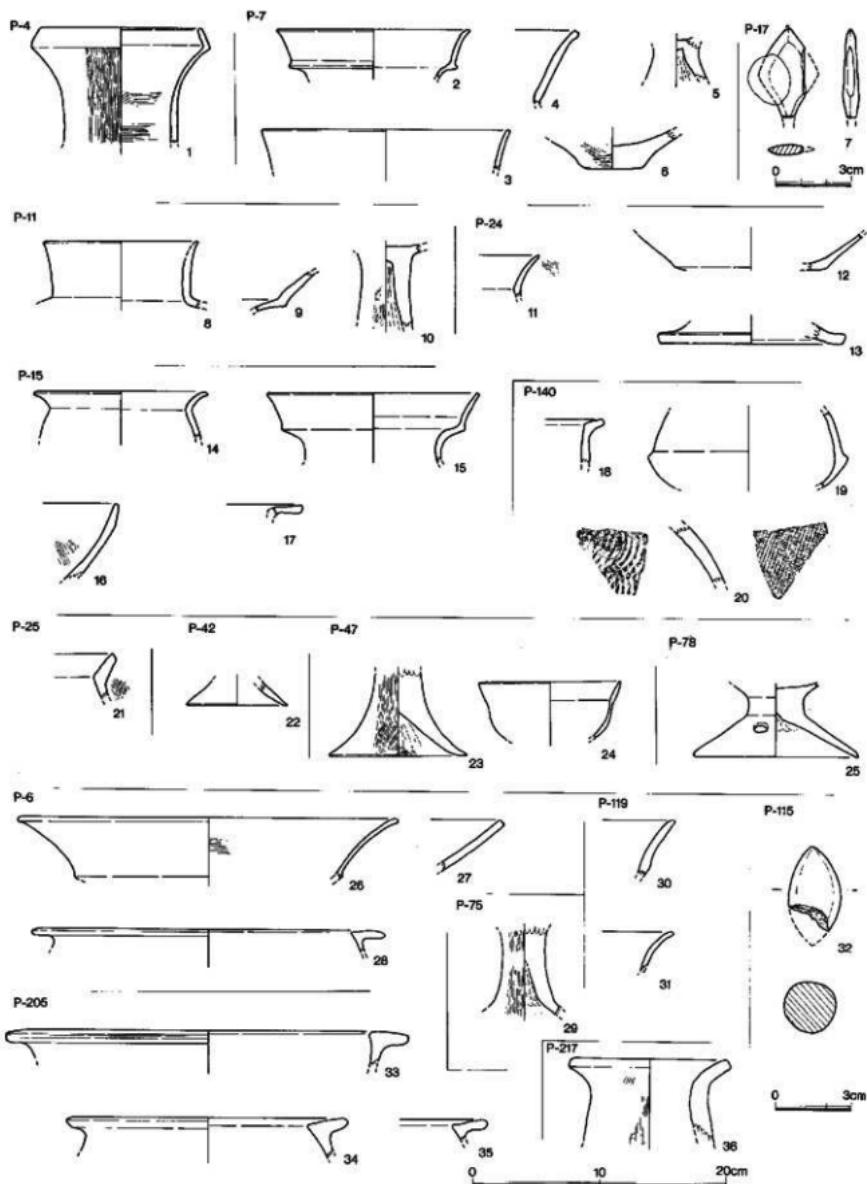


Fig.11 柱穴内出土遺物 (1/2,1/4)

#### 4.その他

調査区内では、上記以外に柱穴100基以上を検出した。このなかには方形の掘り方をもつものや、柱痕が残るものがあるが、建物などの復元はできなかった。柱穴内からは弥生時代中期頃から古墳時代初頭の土器片などが出土した。

#### 4) 小結

第1・3次調査では、弥生時代中期後半～後期の建物、井戸、溝と古墳時代の建物、柵列などを検出した。これ以外に多くの柱穴を検出したものの、削平により遺存状態が悪く、建物の復元はできなかった。

弥生時代中期後半の遺構には少數の柱穴がある。建物などは復元できない。

弥生時代後期の遺構は南側に隣接する7次調査区から連続し、掘立柱建物が主体となり、少數の井戸が分布する状態である。なお、検出された柱穴の多くはこの時期である。

さて本調査区で検出された掘立柱建物(SB101)は、1981年の第7次調査で検出された建物SB01と連続し、桁行9間、梁行2間の東西棟に復元できた。また、東西両端に柵列(SA)と見られる布掘遺構が連結し、全体でコ字形となるという極めて特殊な施設に復元できた。建物については柱筋が通るもの、柱間距離にばらつきが多く、企画性のある建物は復元し難い。柵列は布掘状の掘方に3本の柱を据えるもので、これも柱間距離にばらつきがある。この柵列の類例は比恵遺跡第8、19、39次調査にあり、このうち8、39次調査では倉庫と見られる大型建物と並行して構築されている。また、同様の柵列は市内早良区の有田遺跡群でも確認されている。しかし、それらは建物を囲むか、画する施設と利用されており、本例のように建物と一体となって配列されてはいない。本調査で確認されたこの建物と柵列に囲まれた範囲は東西約28m、南北16m以上ある。その範囲のほとんどは調査区外にあり、内部の遺構については不明である。建物と柵列は柱筋の連続から同時期に存在したと考えられる。その時期を知る手がかりは少ない。柱穴内から出土した遺物を見ると、掘方内には弥生時代中期後半から古墳時代前期までの遺物が出土している。1点ではあるが、建物の柱底埋土中から須恵器壺の胴部破片(Fig.11-20)が出土している。特徴は少ないが、6世紀後半～7世紀前半の可能性が高い。したがって本遺構の造営は古墳時代前期以降であり、廃絶は古墳時代後期以降とみることができる。出土遺物からこれ以上の時期限定は困難であるが、類例の調査、研究成果を通して古墳時代中～後期の構築と推定したい。この推定は日本書紀の宣化元(536)年五月条の「修造官家那津」、いわゆる「那津官家」造営記事とこの種遺構群が関連するという可能性を示している。もちろん、現時点でこの推定を傍証できる資料はなく、調査地点ごとの遺構の特徴や構造、企画性などに較差があることなど、必ずしも同時期に関連して設けられた施設とは認めがたい点もある。こうした点の解明のためにも今後は不明である建物と柵列の北半部分や、それにより区画された内部の調査が必要である。

#### 〈参考文献〉

- 倉住精彦1983「那津官家の修造」「太宰府古文化論叢」吉川弘文館  
柳沢一男1987「福岡市比恵遺跡の官衛的遺物群」『日本歴史』465号  
皆波正人編1993「比恵遺跡群1・2」福岡市教育委員会  
米倉秀紀1993「那津官家?—博多湾岸における三本柱構と大型純柱建物群—」『福岡市博物館研究紀要』第3号

### 第3章 第15次調査の報告

#### 1) 発掘調査の概要 (Fig.12)

第15次調査地点は、比恵遺跡群の中央付近にあり。丘陵最頂部付近に位置する。第9次地点の西側、第5・3次地点の南側に隣接する。この標高は現在約6.5mであるが、これは昭和初期以降の削平による地下げの結果であり、基盤地層の状況から本来は現在より約1mほど高かったと考えられる。

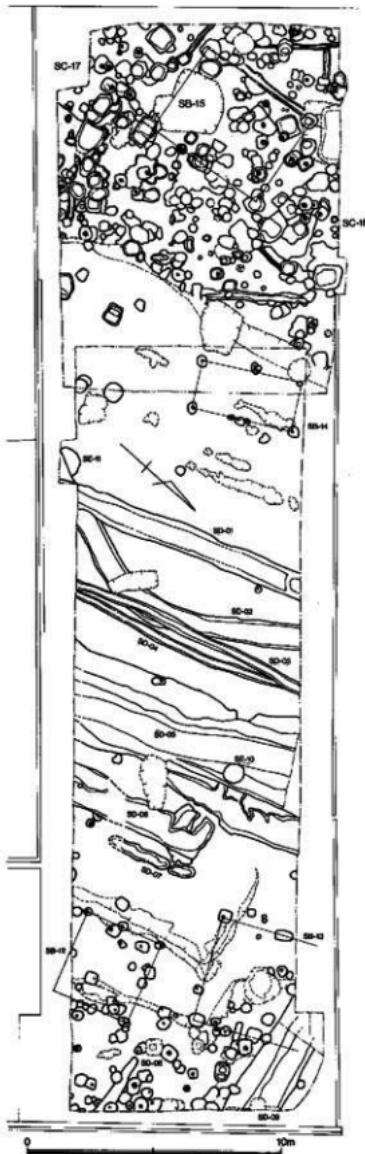
調査は集合住宅建設に伴うものであり、西側を道路に面した南北約12m、東西約46mの範囲558m<sup>2</sup>が調査対象となった。ただし、調査開始時になお、対象地内西側の約180m<sup>2</sup>の店舗が残されていた。その解体が遅れたためにそれを除外した範囲約380m<sup>2</sup>を先行調査し、店舗部分は解体後調査を行った。先行調査は1986年度に行い第15次調査としたが。解体は翌年度となりこの部分の調査は第21次調査とした。各調査に際しては調査区隣地が建物、ブロック塀等であったため、安全確保のため敷地境界より約1mの未調査区を残した。そのため実際の調査面積は第15次調査が278m<sup>2</sup>、第21次調査が168m<sup>2</sup>となり、合計446m<sup>2</sup>であった。なお、第15次調査に際しては、隣接地の地権者である福岡放送株式会社のご好意により、排土置き場として土地の使用を許可いただいた。記して感謝したい。

#### 2) 地層 (Fig.13)

15、21次調査地点は先述のように早く削平されているために、表層域の自然堆積を見ることはできない。両地点の基本土層は以下の堆積が認められる。

1層：褐色土、調査前の表層であり、部分的に畑地耕作土をなす。腐植を含む。30cm前後の堆積がある。  
2層：整地層、建物廃材片等を含む造成土である。鉄材などを含み、この地が第二次大戦前後に鉄工所があつたことと関連するとみられた。30cm前後の厚みがある。

3層：茶灰色耕作土、全体に均質であり、調査区の東西両端では鳥栖ローム層の削平面を直接覆い、堆積する。昭和初期の区画整理事業以後の耕作土とみられる。20~30cmの厚みがある。



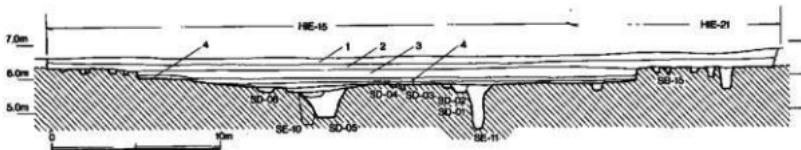


Fig.13 15-21次調査区基本土層模式図 (横1/600, 縦1/150)

4層：灰褐色土、調査区中央に東西約30m幅で拡がる低地部に堆積している。南に隣接する第5・3次調査区でも連続部分が検出されている。本層は水田関連土壌であり、さらに3～4層に細分される。この低地部の水出は、明治年間の地形図に比恵丘陵中央部を南北に貫くような地形として記されている。

### 3) 検出遺構

#### 1.井戸 (Fig.14～16)

SE10 調査区中央にあり、溝SD05の東側斜面を切って掘られている。平面形は上部で径約0.8mの円形、下部でおよそ南北に長い椭円形を呈する。深さは検出面から0.8mを測り、標高4.6mで平坦な床をなす。掘り方中段の標高5.5m付近に段があり、この付近に土器類の遺物が出土した。土器は台付椀以外すべて破片である。弥生時代中期後半の壺(3・9)、高坏(7)と終末期の壺(1)、台付椀(2)、壺(4～6・8)がある。壺破片4～6は同一個体と考えられる。

SE11 調査区南端に接して検出した。南北部を溝SD02が切る。平面形は南北約1.2m、東西約0.9mの楕円形を呈する。深さは検出面から約1.3mを測り、標高約4.4mで小さな床となる。標高5.4～5.5m付近と標高4.8m付近に段があり、下段付近を中心に完形の土器類が括投棄の状態で出土した。土器には完形の壺(1～9)、破片で二重口縁壺(10～12)、壺(13・16～19)、壺(14・15)などがある。このうち破片の15～19は弥生時代中期後半である。そのほかは布留式古段階の特徴をもち、古墳時代初頭に位置づけられる。

#### 2.溝 (Fig.17・18・20～33)

溝は大小9条を検出している。弥生時代から中世までを含み、中央の段落ち部分に集中している。南北に主軸を取り、北側の第5・3次調査区の溝と連続するものが多い。

SD01 調査区中央にあり、溝SD02を切る。ほぼ直線的に南北に掘られた溝である。断面逆台形を呈し、幅約1.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗褐色～黒褐色の腐植混じり土であり、砂質に富む。溝内からは弥生時代から古代の少量の土器片が出土した。Fig.33-16は須恵器壺身であり8世紀代である。本遺構は第5・3次調査の溝SD015に連続する。

SD02 調査区中央にあり、溝SD01・03に切られる。東側に突出するように緩くカーブする。断面逆台形を呈し、幅約1.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は上部が黒褐色土、下部が砂質土である。溝内からは弥生時代中期～古墳時代前期の土器類が出土した。土器には壺(19～21・26・30・31)、壺(24・27・28)、楕(22・23)、高坏(25)、土器取手(29)がある。

SD03 調査区中央にあり、溝SD02,04を切る。直線的に南北に掘られている。断面は浅いU字形か逆台形を呈し、幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。埋土は黒褐色の腐植土である。出土遺物は少ない。本遺構は第5・3次調査の溝SD019に連続する。

SD04 調査区中央にあり、溝SD03に切られる。直線的に南北に掘られている。断面は逆台形を呈し、幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。埋土は黒褐色の腐植土である。出土遺物は少ない。

SD05 調査区中央にあり、井戸SE10が切る。本遺構の調査過程で重複して並行する2条の溝があることが判明した。溝の掘り直しと見ることも可能であるが、時期差が大きく連続した掘削とは考えられない。本体部分をSD05c、重複した溝の内下部の溝をSD05b、上部の溝をSD05aとする。

SD05cは直線的に南北に掘られている。断面は逆台形を呈し、中段の標高5.3m付近で傾斜が変化する。検出面での規模は上部幅2.5~3.0m、底幅約1.5m、深さ0.9~1.1mを測る。溝底面の隅部に沿って杭列が見られる。杭は1.0~1.2mおきに底面から約0.5mほど打ち込まれており、遺存状態の良い4点について図化した。これらの杭は径5~7cmの小木の幹材であり、上部は欠失している。検出状態で垂直のものとわずかに傾斜したものがあるが、本来は溝壁面に沿って垂直に打たれた杭列であろう。杭の直径から見て溝の上部まで伸びることはなく、下部の護岸保護施設の一部と考えられる。埋土は上部が黒褐色腐植土であり、中部は黒色土と地山上の薄互層、下部は黒色土と地山水成二次堆積物となる。出土遺物は上部の黒褐色土の下半に集中出土した(Fig.18)。遺物は土器類と土製品があり、調査区内で平面的に3群に分かれ、何れも圧碎した完形土器を含み、積み重なった状態で検出された。

土器には壺類(1~121・167~169・180~193・199~200)、壺類(122~141・143~166・201~205)、鉢

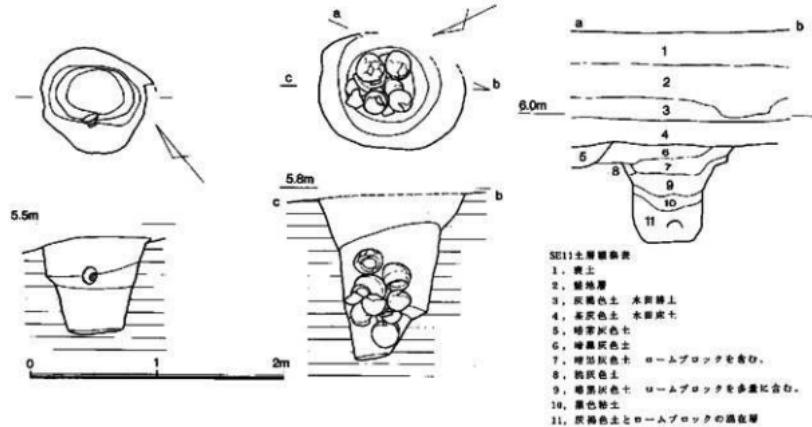


Fig.14 井戸SE10,11実測図 (1/40)

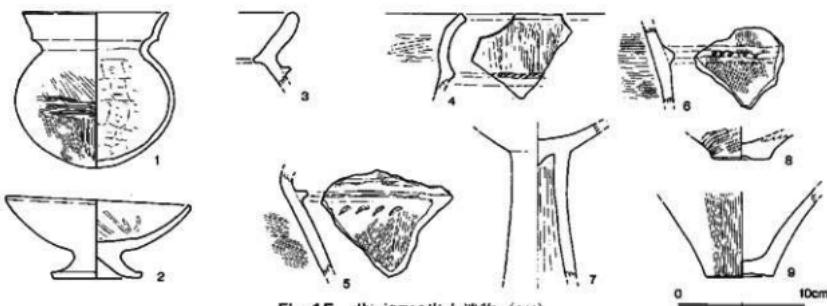


Fig.15 非戸SE10出土遺物 (1/4)

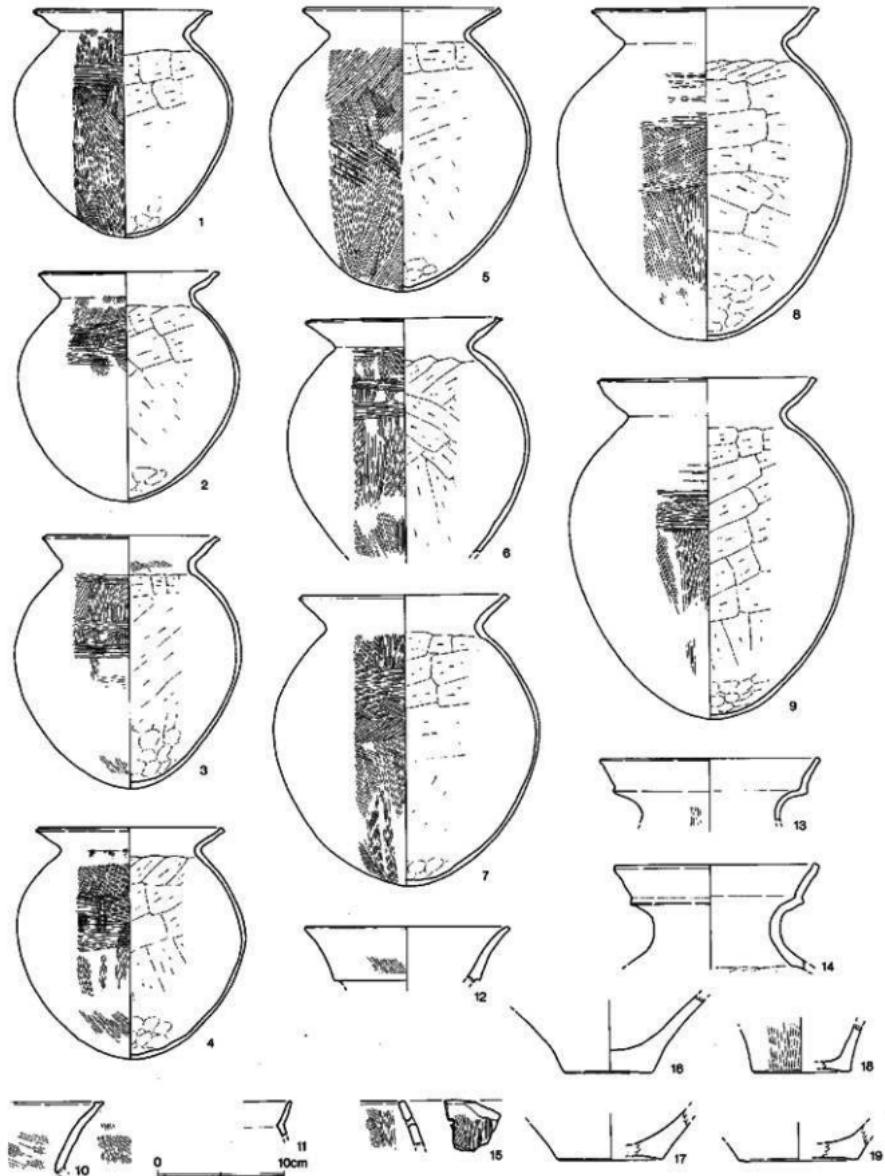


Fig.16 井戸SE11出土遺物 (1/4)

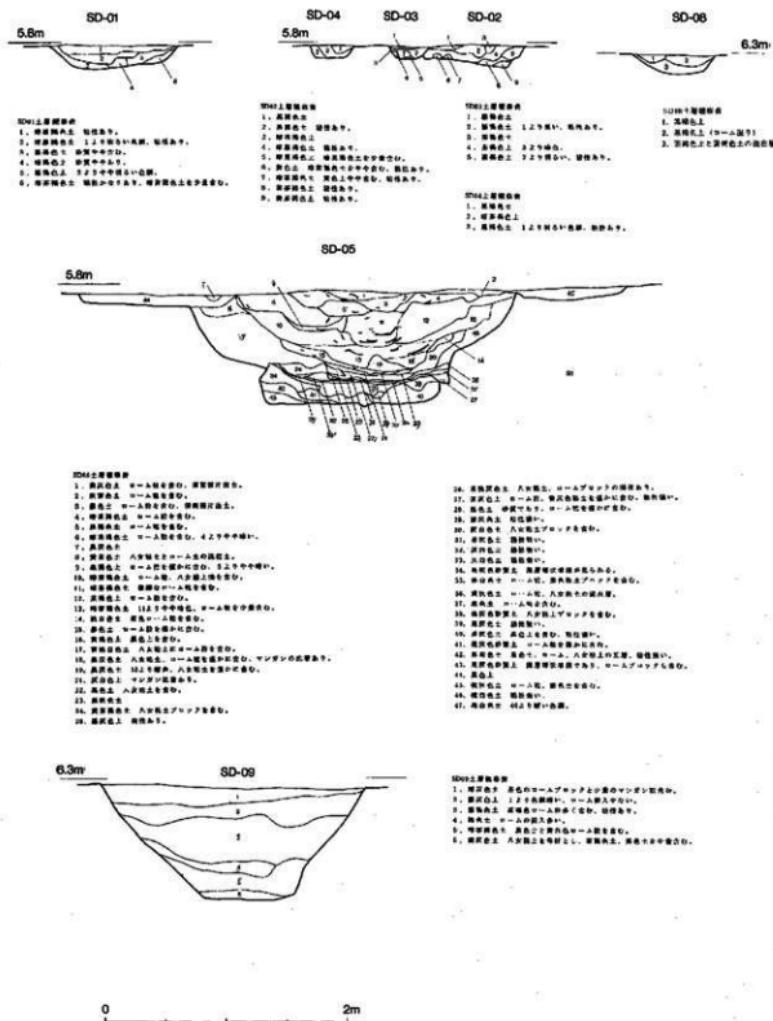


Fig.17 溝土層断面図 (1/40)

類（170～179・189・190）、高坏類（142・194～196）、蓋類（197・198）、器台類（210～236）があり、土製品には土製投弾（206～209）がある。壺類には小型壺（1～4・8～12・169）、中型壺（5～7・13～30）、大型壺（31～40・79～88）、装飾壺（167・168）がある。このうち8や破片の41～53は須玖I～須玖II式古相段階に比定される。それ以外は須玖II式の新相に位置つけられる。なお、55・56は跳ね上がり口縁であり、柏屋都以東からの搬入品の可能性がある。壺類には袋状口縁壺（122～126）、短頸壺（127～131）、直口壺（132～134）、広口壺（135～141）、鋤先口縁壺（143～156・161）、ミニチュア壺（157～160）、ひさご形土器（162～166）がある。蓋類には壺蓋（197）、短頸壺蓋（198）がある。器台類には袋状LII縁器台（210）、直口縁器台（211～214）、粗製器台（215～236）がある。粗製器台には支脚を含んでいる可能性がある。本遺構は第5次調査の溝SD010に連続する。

SD05bは溝SD05cの上部埋土を切り、溝SD05aに切られる。溝SD05cの覆土内にあり、東側に沿って南北に掘られている。断面は逆台形であり、幅約1.0m、深さ約0.3mを測る。埋土は暗褐色土である。

遺物は溝内から散漫に出土した。遺物には土器と土製品がある。土器には壺（1～11）、壺（12）、高坏（15）、鉢（13・14）がある。土製品には紡錘車（16）がある。弥生時代後期から終末期までの遺物が含まれている。

SD05aは溝SD05cと溝SD05bを切る。溝SD05cを覆うように、南北に掘られている。断面では浅いU字形であり、幅約1.8m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗褐色土である。多くの弥生時代土器片と共に少量の須恵器片が出土した。明確に時期の分かれるものはないが、17は壺口縁から肩部の破片であり、古墳時代後期の範疇に含まれる。本遺構は第5次調査の溝SD029と連続する。

SD06 調査区中央にあり、溝SD05の東側に並行する。調査区中央で途切れる。断面逆台形を呈する浅い溝である。幅約1.2m、深さ約0.2mを測る。埋土は黒褐色土である。溝内からの出土遺物は少ない。

SD07 調査区中央にあり、溝SD06の東側に並行する。調査区中央に断続している。断面逆台形を呈し、

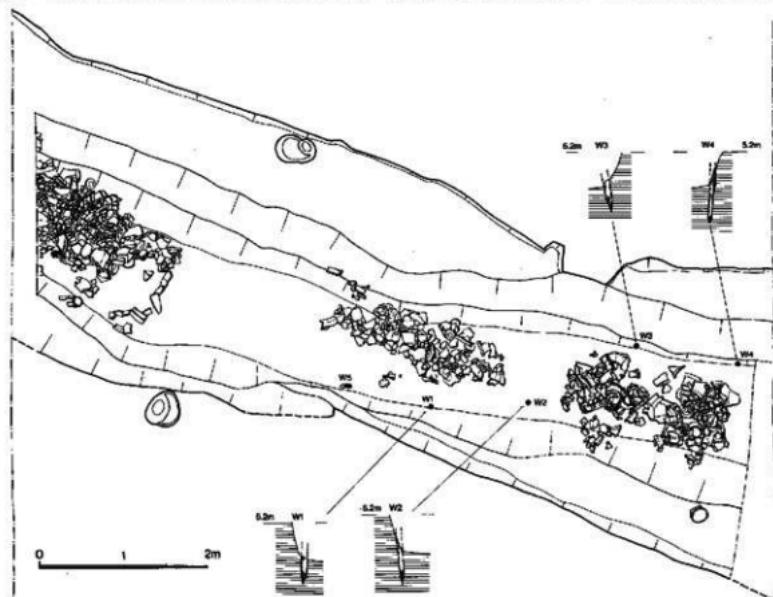


Fig.18 溝SD05c遺物・杭列出土状況 (1/60)

幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。

SD08 調査区東端にあり、長さ3mほどで途切れる。東西方向に直線的に掘られている。断面U字形を呈し、幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は黒褐色土である。溝内からは少量の弥生時代土器片が出土した。

SD09 調査区東端にあり、東西方向に直線的に掘られている。断面逆台形を呈し、幅約2.2m、深さ約0.9mを測る。埋土は全体に黒褐色土であり、腐植に富み地山土塊を少量含んでいる。溝内下半分は弥生時代中期～古墳時代後期の土器類が出土し、上部に古代の須恵器17,18が出土した。土器には甕(1~3・11)、壺(4)、高杯(5・6)、鉢(7)、取手(12・13)、手すくね(15)があり、須恵器には坏蓋(9)、坏身(17,18)、椀(8)、壺(10)、甕(14)がある。本遺構の埋没は古墳時代後期に始まり、8世紀代まで溝の痕跡が残っていたと考えられる。この溝は東側の第9次調査の溝SD09と連続するとみられ、出土遺物からも矛盾しない。

### 3.掘立柱建物 (Fig.19)

本調査では100基以上の柱穴を検出した。そのうち多くに柱痕などが認められ、掘立柱建物などの構造物の一部と推定された。しかし、調査区が狭く、また遺構の切り合いも多く、建物として復元できたのは3棟であり、柱穴17基分に過ぎない。

SB12 調査区南東側で検出した。2×2間の建物である。N-21°-W、桁行約3.4m、梁行約3.2mを測る。柱掘り方はすべて不整な円形を呈し、およそ0.3~0.4mである。柱穴床は平坦であり、検出した

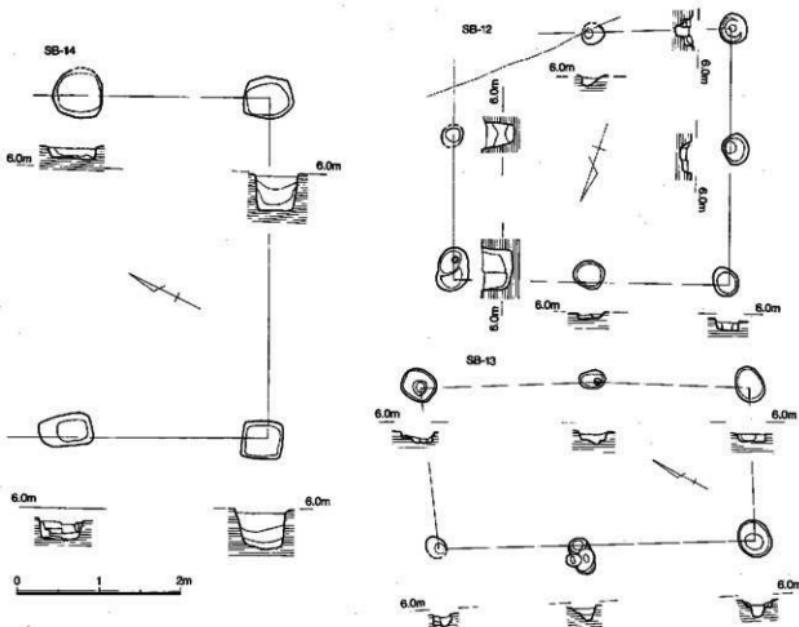


Fig.19 掘立柱建物実測図 (1/60)

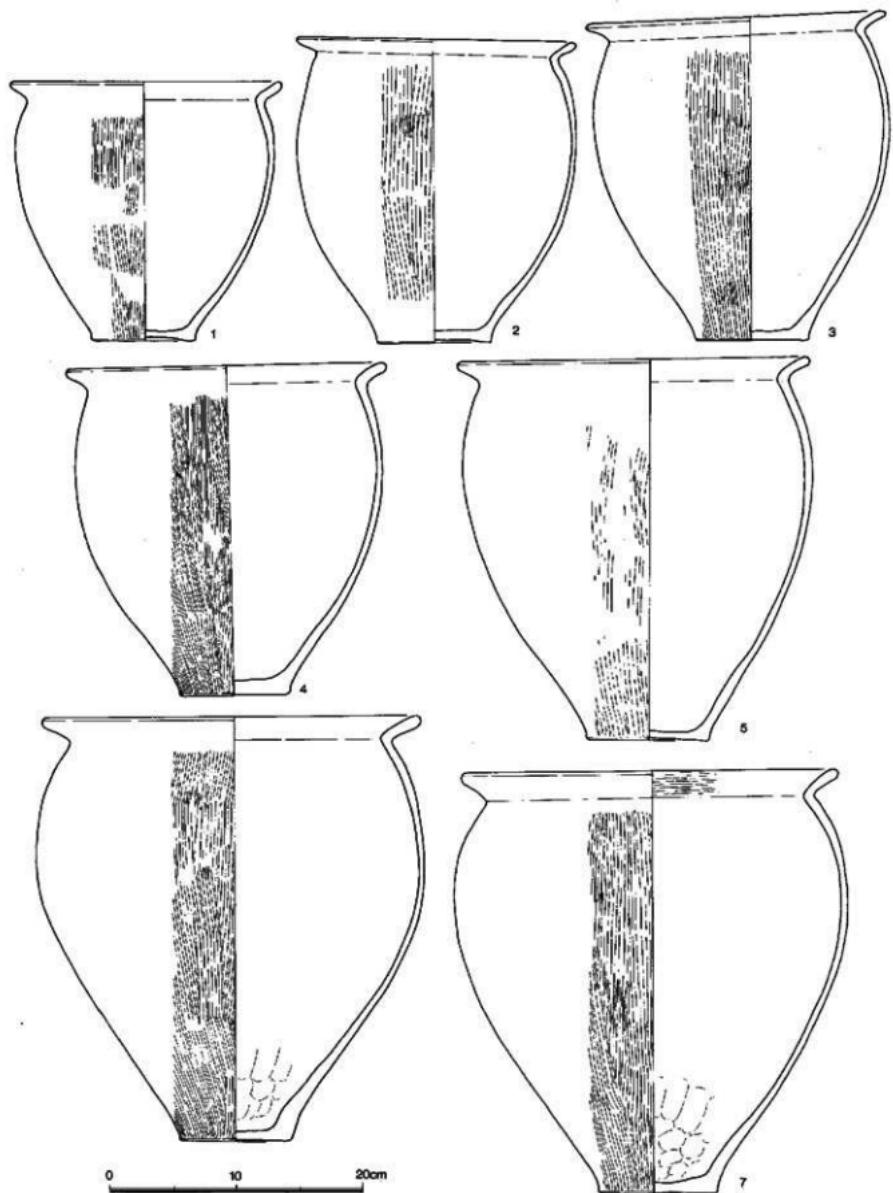


Fig.20 溝SD05c出土遺物1 (1/4)

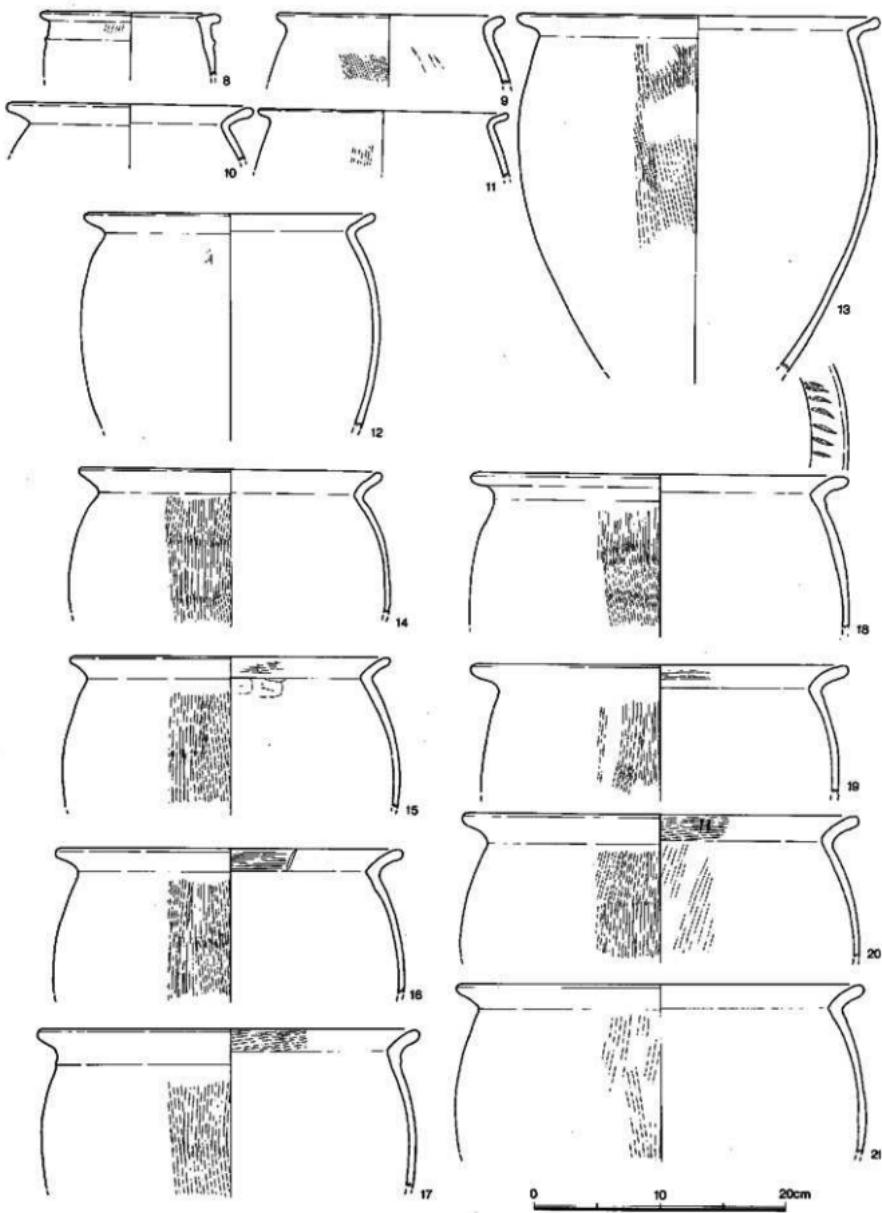


Fig.21 清SD05c出土遺物2 (1/4)

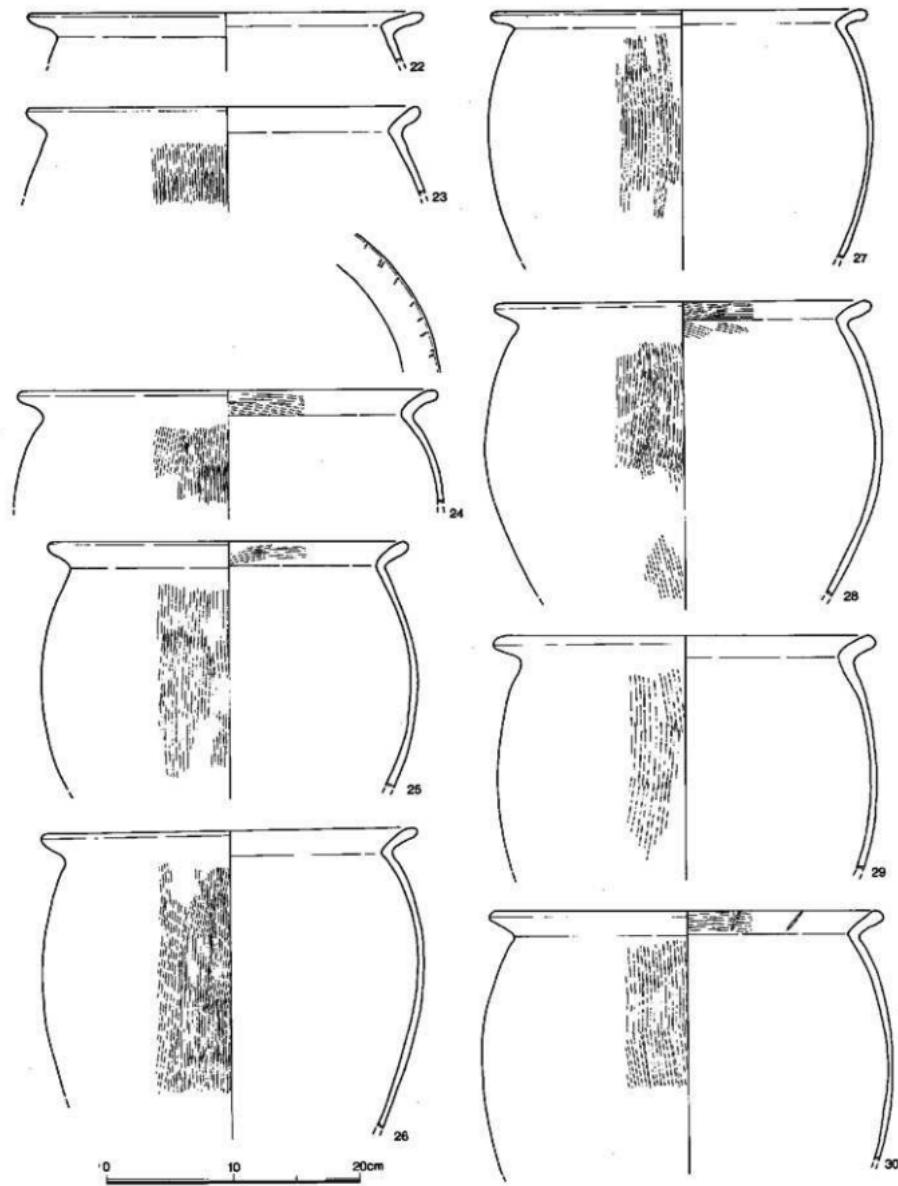


Fig.22 溝SD05c出土遺物3 (1/4)

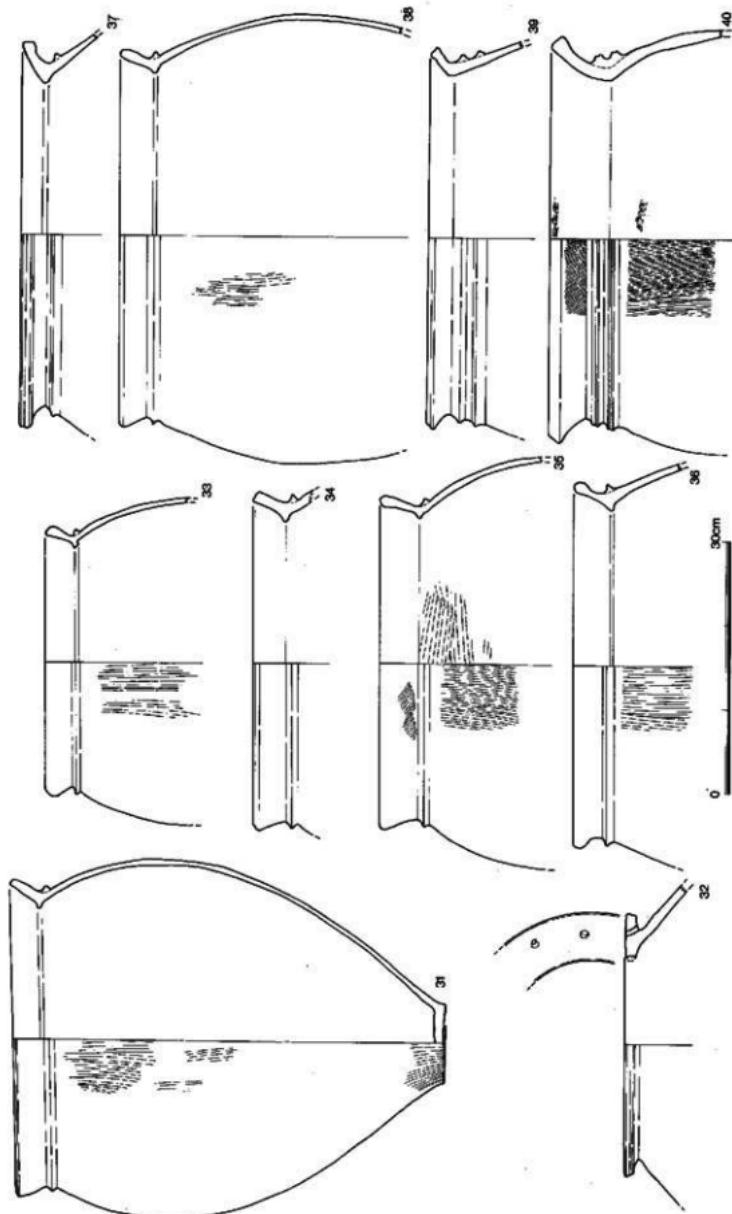


Fig.23 溝SD05c出土遺物4 (1/6)

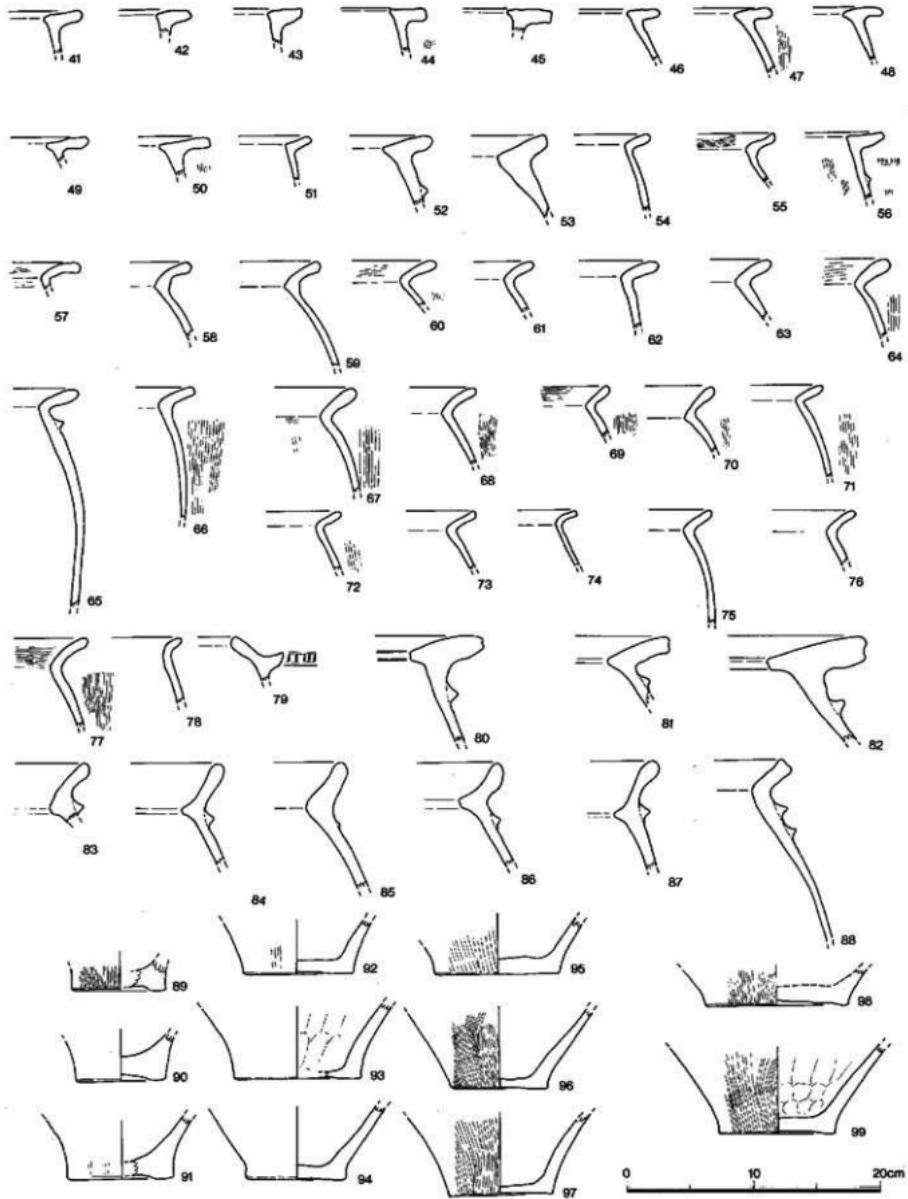


Fig.24 溝SD05c出土遺物5 (1/4)

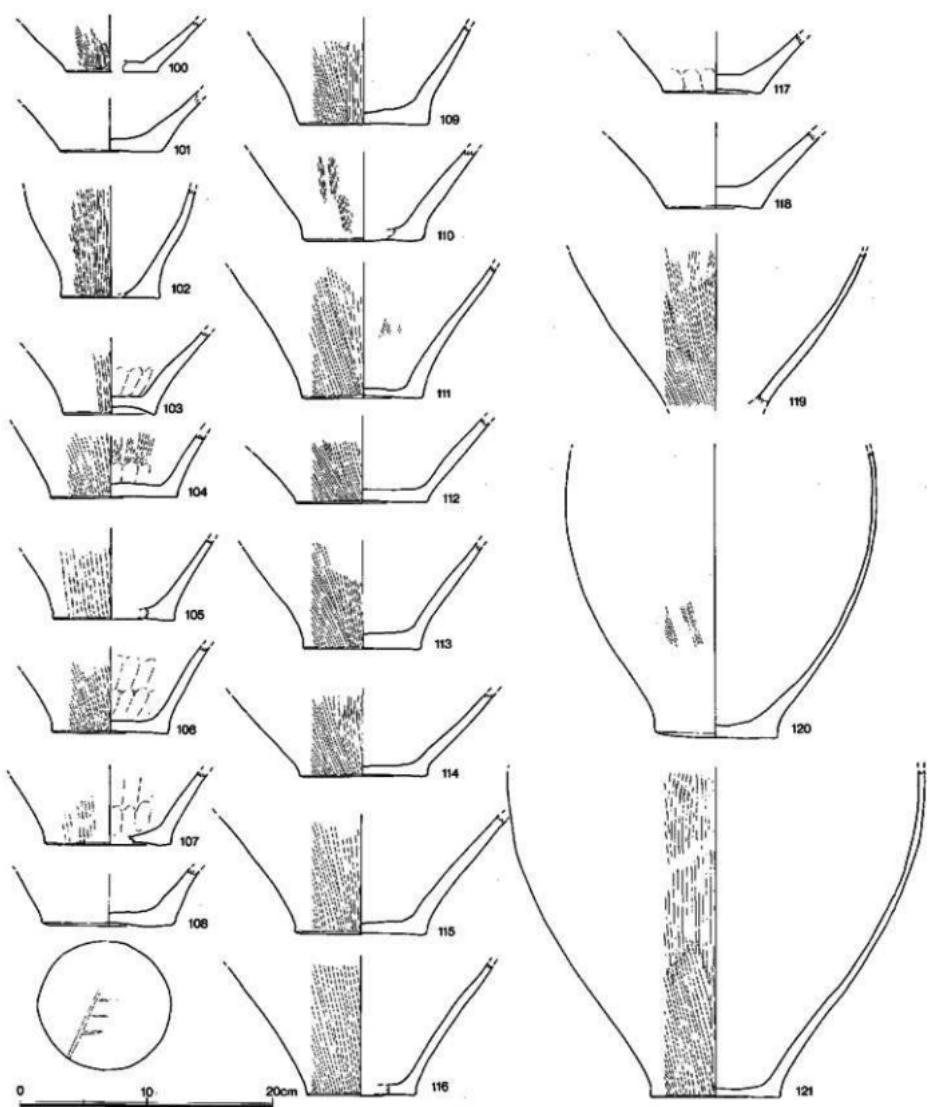


Fig.25 津SD05c出土遺物6 (1/4)

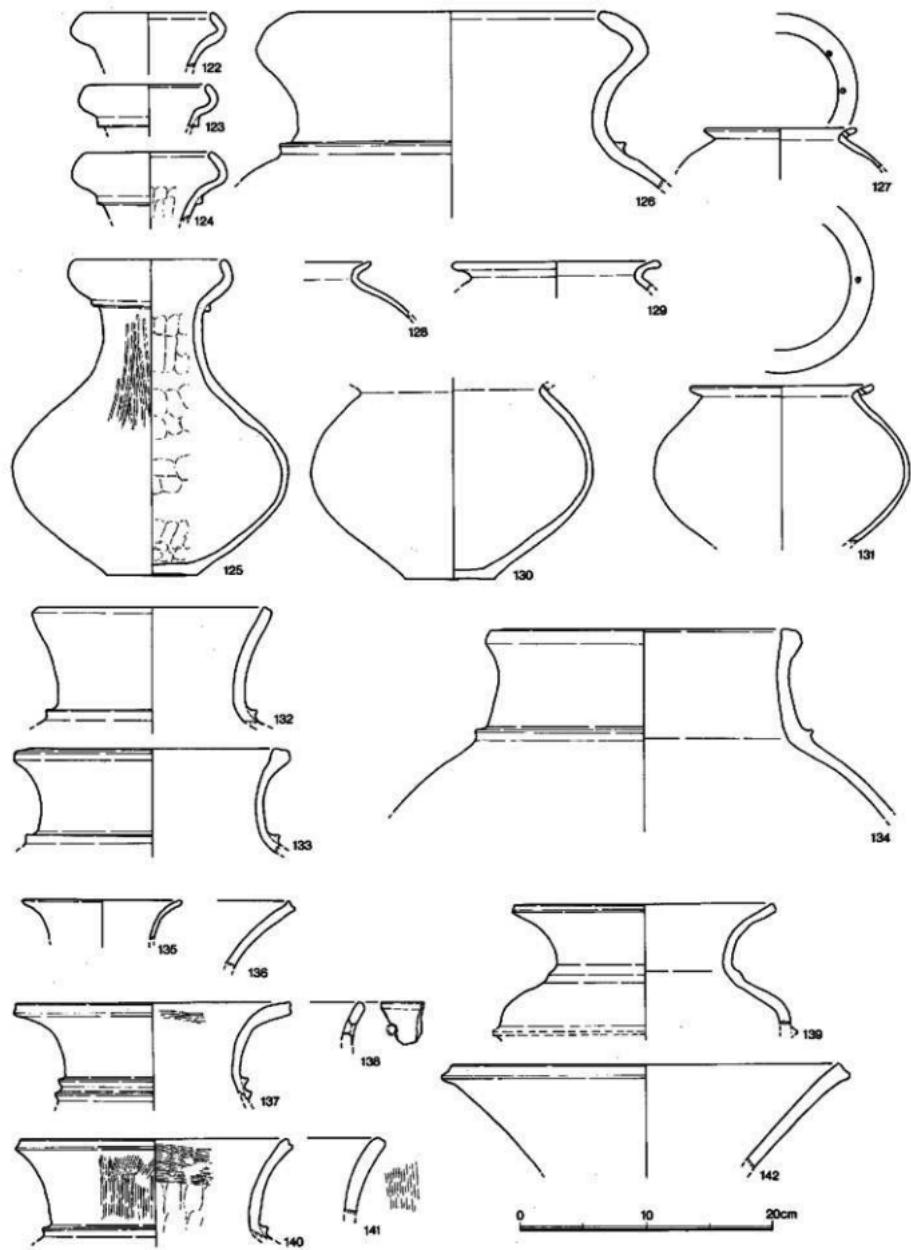


Fig.26 漢SD05c出土遺物7 (1/4)

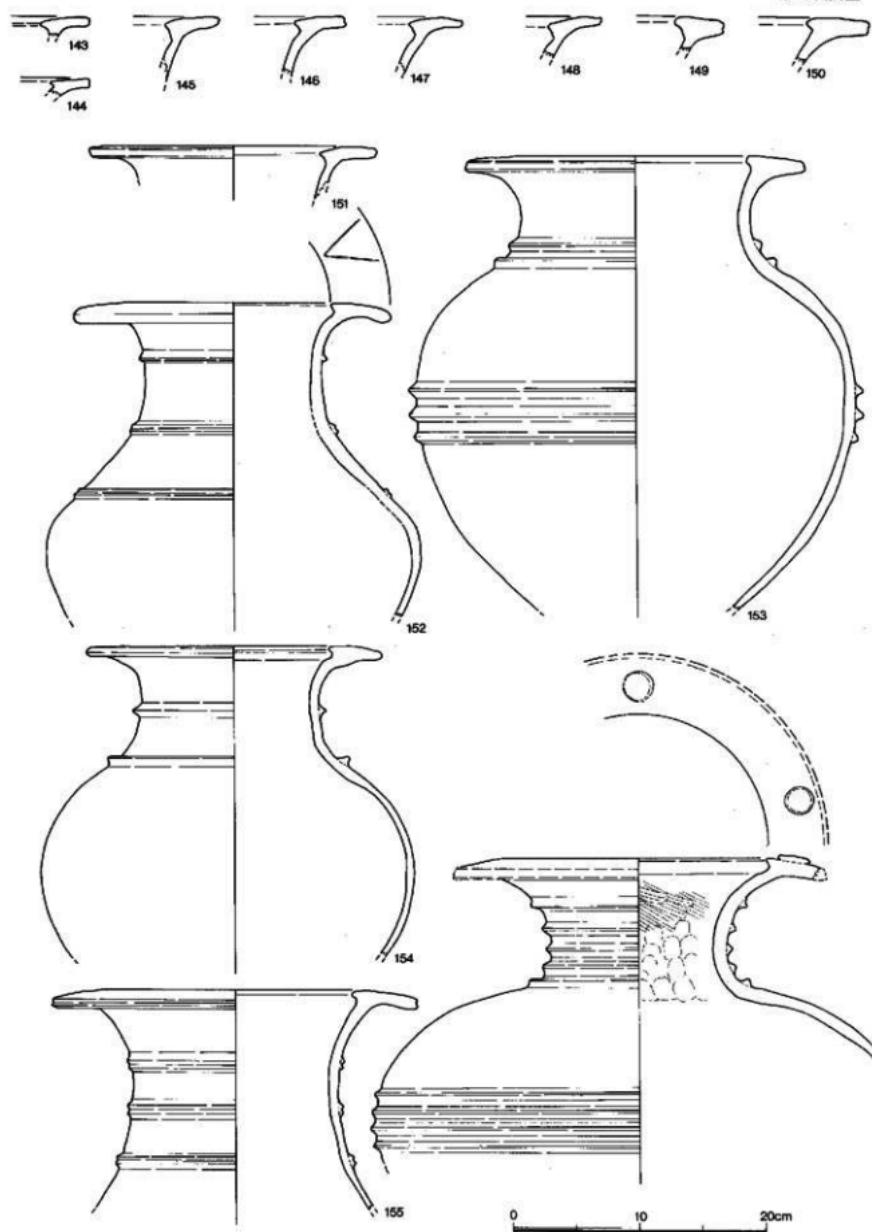


Fig.27 满SD05c出土遺物8 (1/4)

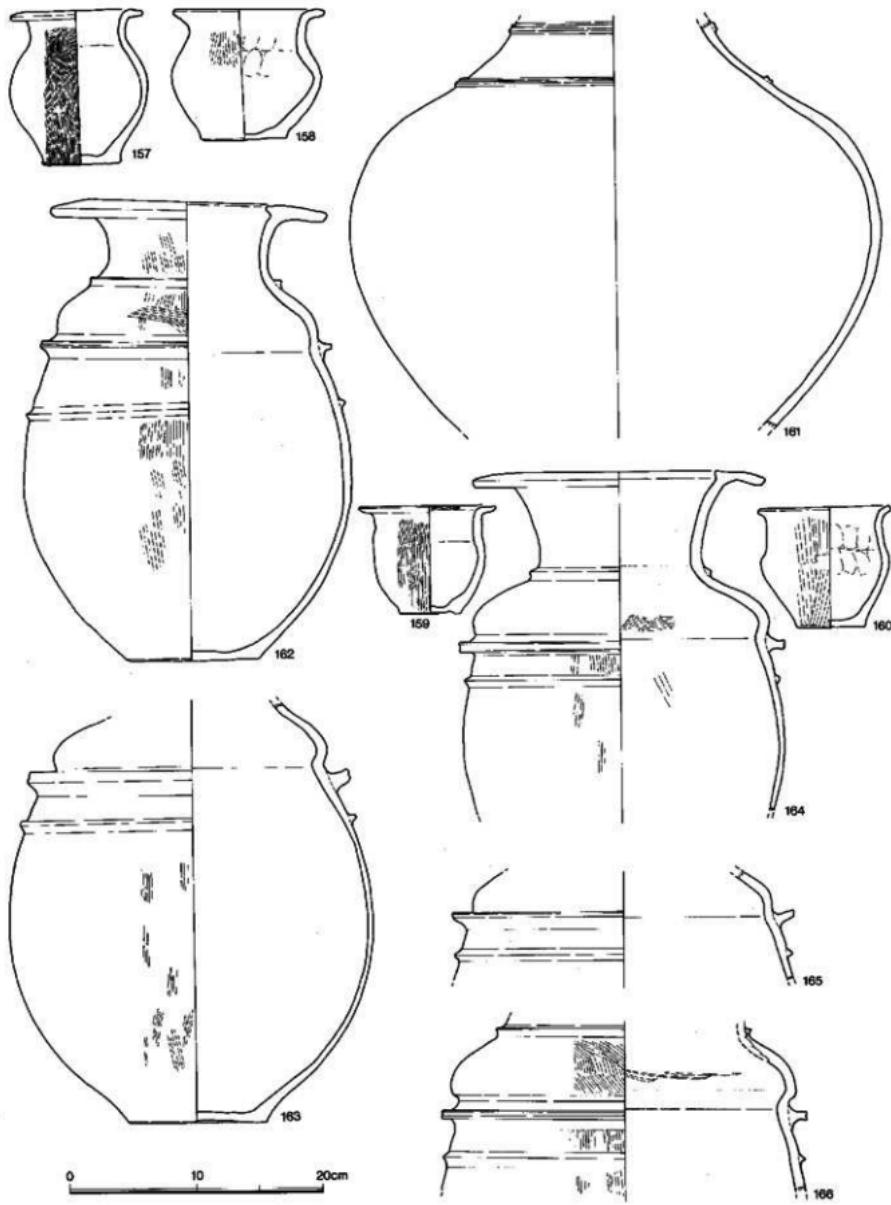


Fig.28 漢SD05c出土遺物9 (1/4)

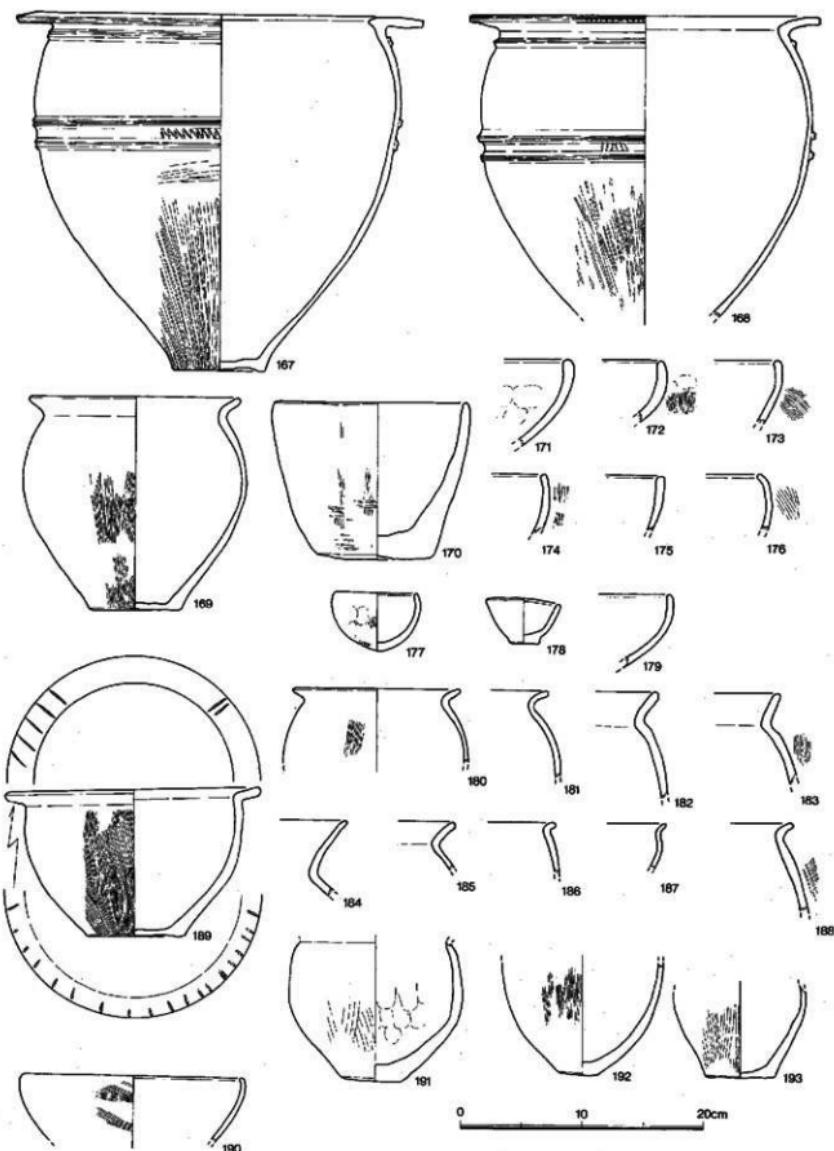


Fig.29 溝SD05c出土遺物10 (1/4)

7基の柱穴のうち4基に柱痕が観察できる。柱痕は径0.15~0.2mを測る。柱掘り方内から少量の弥生時代土器片が出土したが、図化できるものはない。この建物は中央の柱穴が未確認であるが、形態から見て竪柱の建物であり、時期は古墳時代後期以降に位置つけられよう。

SB13 調査区北東側で検出した。1×1間以上の建物である。N-30°W、桁行2.4m以上、梁行約4.1mを測る。柱掘り方はすべて不整な隅丸方形を呈し、およそ0.6×0.4mを平均とする。柱穴床は平坦であり、検出した4基の柱穴のうち1基に柱痕が観察できる。柱痕は径約0.15mを測る。柱掘り方内から少量の弥生時代土器片が出土したが、図化できるものはない。この建物は、形態から見て1×2間の建

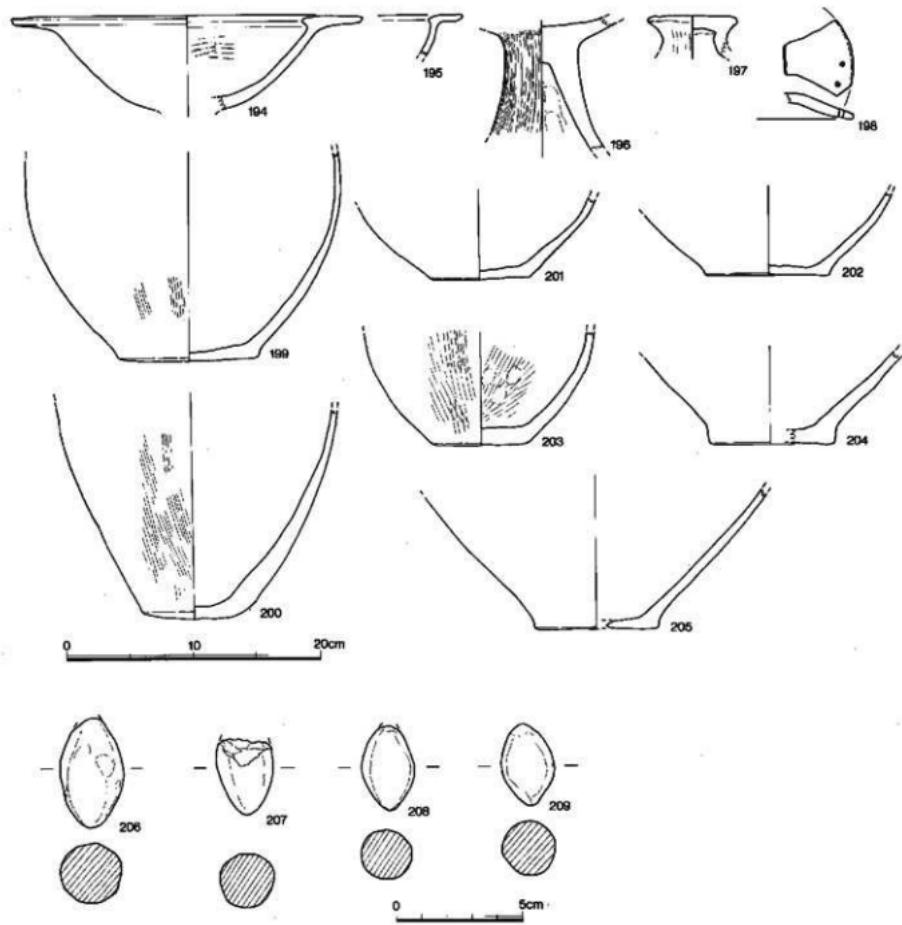


Fig.30 溝SD05c出土遺物11 (1/2,1/4)

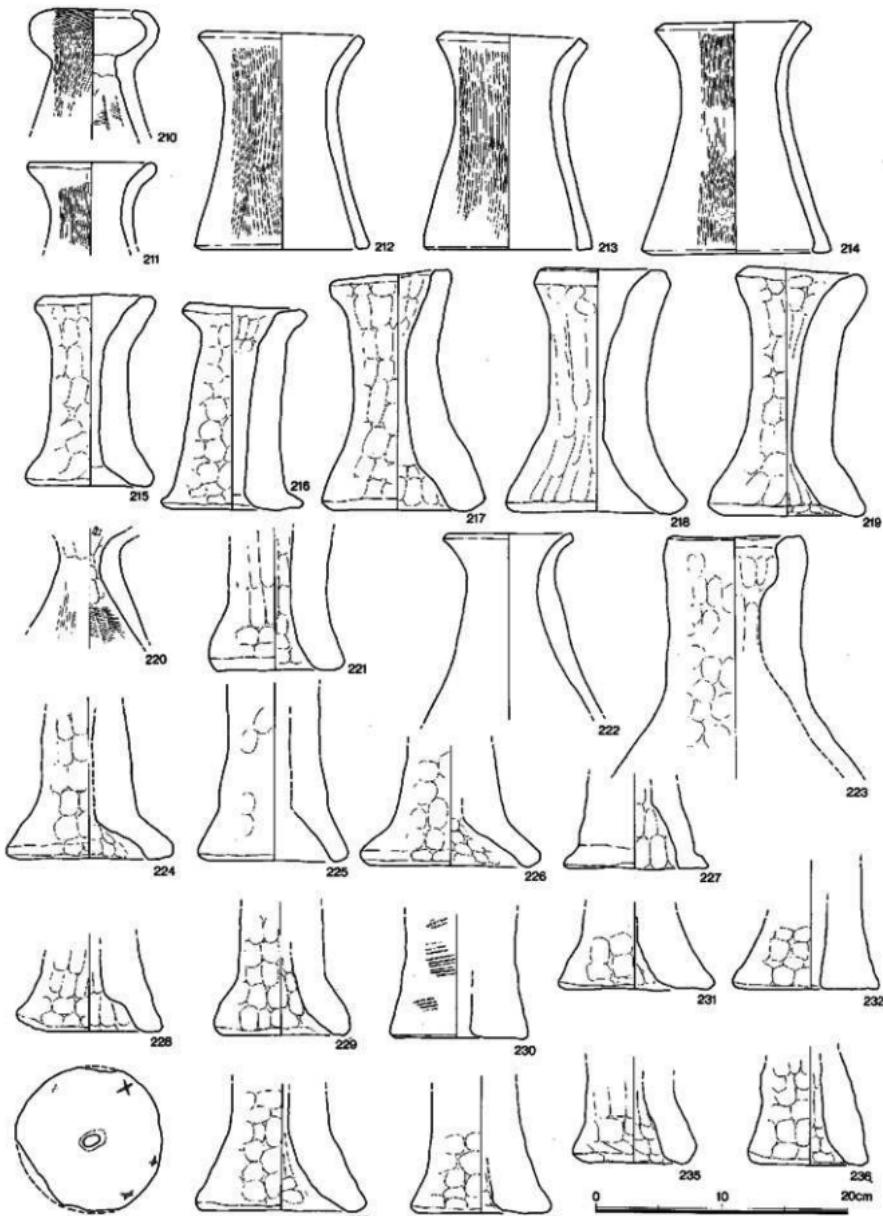


Fig.31 溝SD05c出土遺物12 (1/4)

物であり、時期は弥生時代中期～後期に位置つけられよう。

SB14 調査区北西側で検出した。1×2間の建物である。N-26°-W、桁行3.9～4.0m、梁行1.9～2.1mを測る。柱掘り方はすべて不整な凹～梢円形を呈し、大きさはおよそ0.3～0.4mである。柱穴床は平坦であり、柱部分が沈み込んでいる。検出した6基の柱穴すべてに柱痕が観察できる。柱痕は径0.1～0.2mを測る。柱掘り方内からは遺物の出土はない。

#### 4.その他

以上報告した遺構以外に、柱穴や水田跡がある。柱穴については先述した。柱穴内からは弥生時代中期から古墳時代後期の遺物が少量出土している。また、古代の遺物が出土した柱穴も少数ある。何れも遺物量が少なく推定年代の上限を示すものと理解したい。水田は調査区中央の低地部にあり、幅約30mで南北に展開している。これは北側の第5次調査でも確認されている。ただし、水田畔や足跡などは認められず、水田土壤の分布があるだけである。時期は中世～近世とみられた。

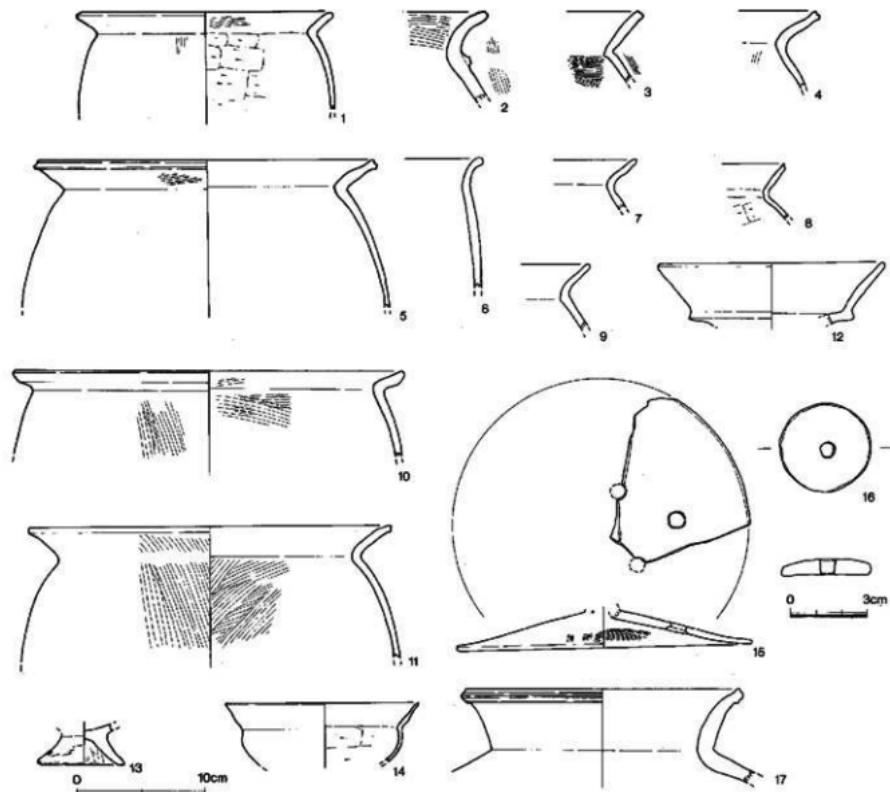


Fig.32 溝SD05a、SD05b出土遺物(1/2,1/4)

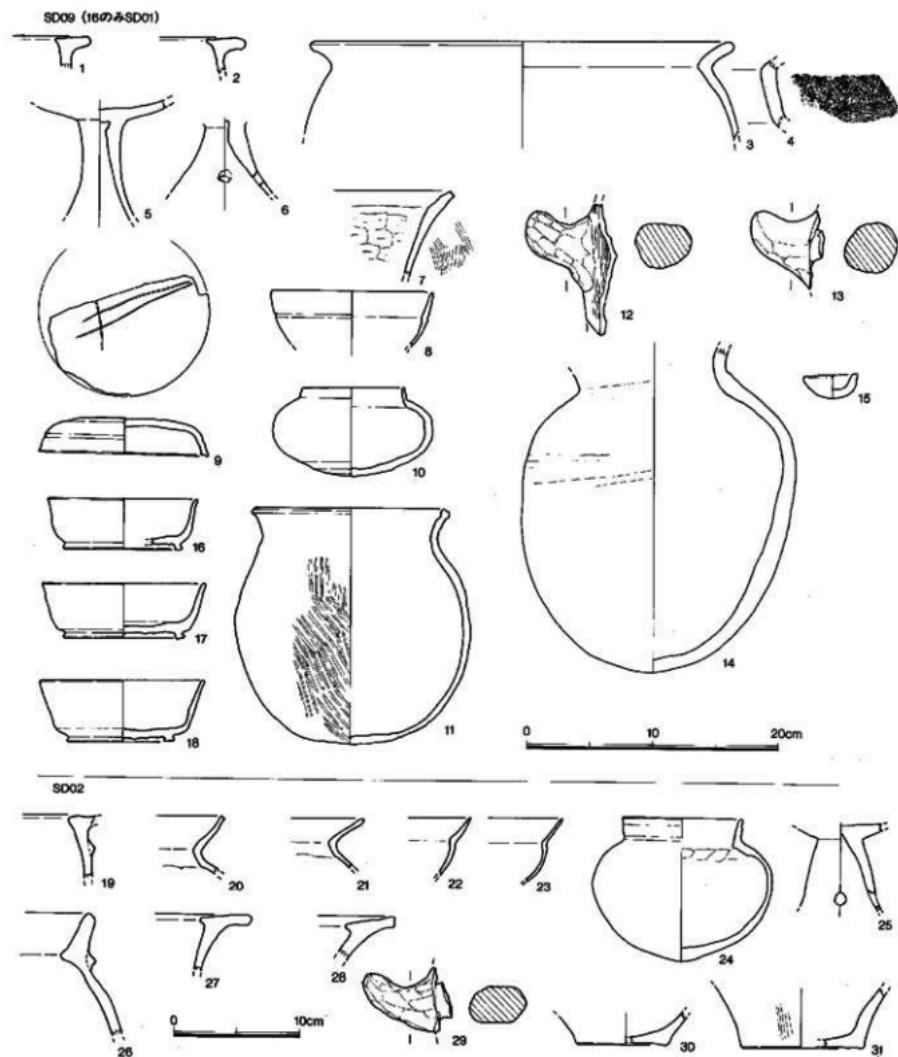


Fig.33 溝SD01、SD02、SD09出土遺物 (1/4)

#### 4) 小結

第15次調査では、弥生時代中期後半～古墳時代前期の建物、井戸、溝や、古墳時代後期の溝、古代以降の溝、水田などを検出した。これ以外に多くの柱穴を検出したものの、建物の復元はできなかった。調査範囲は微地形であるが、中央の低地部と両側の高地部に分かれ、遺構はこうした地形に沿って分布している。なお、本調査地区は昭和初期に区画整理による大規模な地形変形を被っており、高地部でも約1mの削平を受けていることが判明している。

調査区内での遺構の変遷は次のようになる。

弥生時代中期後半から末の遺構には溝SD05cと柱穴などがある。この溝は検出面で幅2.5～3.0m、深さ約1.5mを測る。溝の底部に残る護岸保全とみられる杭列や水成堆積物からみて、少なくとも溝下には常時流水があったと考えられる。溝は埋没の後半段階に多量の土器類が投棄されており、その時期は須恵II式の新相、弥生時代中末期から後期初頭に比定される。ただし、この出土状態から見て溝の掘削や利用はそれ以前に遡るのが確実であろう。

弥生時代後期中頃までの遺構は明確でないが、建物SB13、SB14は弥生時代中期からこの時期までの時期に位置つけられる。

弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構としては井戸SE10、SE11、溝SD02、SD05bなどがある。

古墳時代後期の遺構としては建物SB12、溝SD03、SD04、SD05a、SD09がある。

古代～中世の遺構は溝SD01がある。SD01からは古代の遺物が出土したが、連続する第53次調査のSD015からは14世紀代の遺物が出土している。中世に下るか。

なお、中世以降には、中央低地部に水田が造られ、近世以降まで継続している。

さて、分布上は弥生時代から古墳時代前期については溝や井戸、建物は調査範囲全体にある。東側に建物や柱穴が集中するが、中央部が現在約0.5m低い低地部となり、遺構が切られている。このことから見て、この段階から低地部が存在したかは疑問である。低地部に遺存する建物(SB14)の柱穴などが極めて浅いことからもこの段階には低地部が存在しなかった可能性が高い。

古墳時代後期には弥生時代の溝SD05cに重複し、または並行した西側に多数の溝が掘られている。低地部の溝以外の遺構が少ないと見て、この時期に低地部の開削、形成があったと考えられる。

古代から中世にも引き続き低地部に溝が掘られている。室町時代には溝SD01が掘られ、同時期にはこの低地部が確実に水田として利用されている。この水田は近代まで引き継がれ、昭和初期の区画整理により埋没されたとみられた。

二度の削平以前の地形を前提に、この溝SD05cを復元すると、幅約5m、深さ約2.5mの大溝となる。この大溝の埋没以後に台地中央にちかいこの周辺への水利が可能となり、古墳時代後期には削平が開始された。この時期の開田は耕土などが不明瞭で明確ではないが、古代から中世には次第に低地部の拡大による耕作面積の増大が進められているようだ。

こうした点から見て、弥生時代中期末頃に比恵台地上に南北に大溝が掘られたことをきっかけとして周辺に地形の変化が生まれ、それは近代まで周辺に影響を与えたと理解される。つまり、比恵遺跡群と那珂遺跡群の境界線上の東西の低地部や比恵丘陵を縱断する低地部として痕跡を留めていたのである。

## 第4章 第21次調査の報告

### 1) 発掘調査の概要

第21次調査地点は、比恵遺跡群の中央付近にあり。丘陵最頂部付近に位置する。第9次地点の西側、第5・3次地点の南側に隣接する。この標高は現在約6.5mであるが、これは昭和初期以降の削平による地下げの結果であり、基盤地層の状況から本来は現在より約1mほど高かったと考えられる。

調査は集合住宅建設に伴うものであり、西側を道路に面した南北約12m、東西約46mの範囲558m<sup>2</sup>が調査対象であったが、既存の店舗など建物解体の都合から西側約180m<sup>2</sup>については、1989年3月に別途調査を行った。先行調査は1986年度に第15次調査として実施し、この西側部分の調査は第21次調査とした。調査に際しては調査区隣地が道路、建物、ブロック塀等であったため、安全確保のため敷地境界より約1mの未掘区を残した。そのため実際の調査面積は168m<sup>2</sup>となった。

調査範囲は15次調査であった低地部の西側にあたり、全体に水出開削に伴う削半を免れた高地部である。重機による上部土除去後、手作業にて遺構検出、調査を行った。

遺構としては竪穴式住居、掘立柱建物、溝、柱穴が検出された。解体された建物の基礎により一部は破壊され、また遺構は切り合い、重複が著しく、また調査範囲の狭さから遺構構成の抽出が十分にできたとは言いかない。以下では遺構ごとに報告を進める。

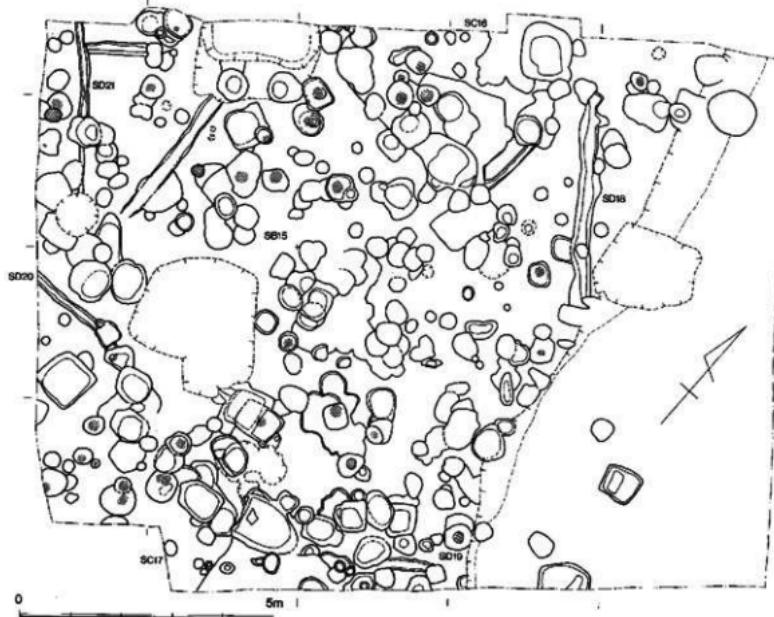


Fig.34 比恵遺跡群21次調査区全体図 (1/100)

## 2) 検出遺構

21次調査では、堅穴式住居2、掘立柱建物1、溝4条、柱穴280余を検出した。

### 1. 堅穴式住居(Fig.35)

SC16 調査区北端に検出した隅丸方形の住居跡である。北側半分は調査区外にのびる。床面まで削平され、多数の柱穴に切られているために全体は不明である。東と南壁に沿った壁溝により、規模が推定できる。東西約4.2m、南北3m以上を測り、明確ではないが4本主柱とみられる。

SC17 調査区南西端に検出した隅丸方形の住居跡である。住居の北東隅部のみが検出された。SC16と同様に遺構の遺存は悪い。僅かに残された壁溝から、規模は東西3m以上、南北2m以上を測り、明確ではないがこれも4本主柱とみられた。

### 2. 掘立柱建物(Fig.35)

SB15 調査区中央で検出した1×2間の建物である。主軸はN-07°-W、桁行約5.0m、梁行約4.0mを測る。柱掘り方はすべて隅丸方形を呈し、大きさはおよそ0.8×0.6m前後である。柱穴床は平坦である。検出した6基の柱穴には柱痕は観察されていない。柱掘り方内からは少量の遺物が出土した。

### 3. 溝(Fig.34)

SD18 調査区東側で検出した。両端は削平や切り合いのために途切れている。N-36°-W方向に直線的に掘られている。幅0.3~0.4m、深さ約0.1mを測る。

SD19 調査区南端で検出した。柱穴と切り合い断片的にとらえられる。東西方向に3.6mが遺存する。おおよそN-55°-E方向で、幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。堅穴式住居の壁溝の可能性がある。

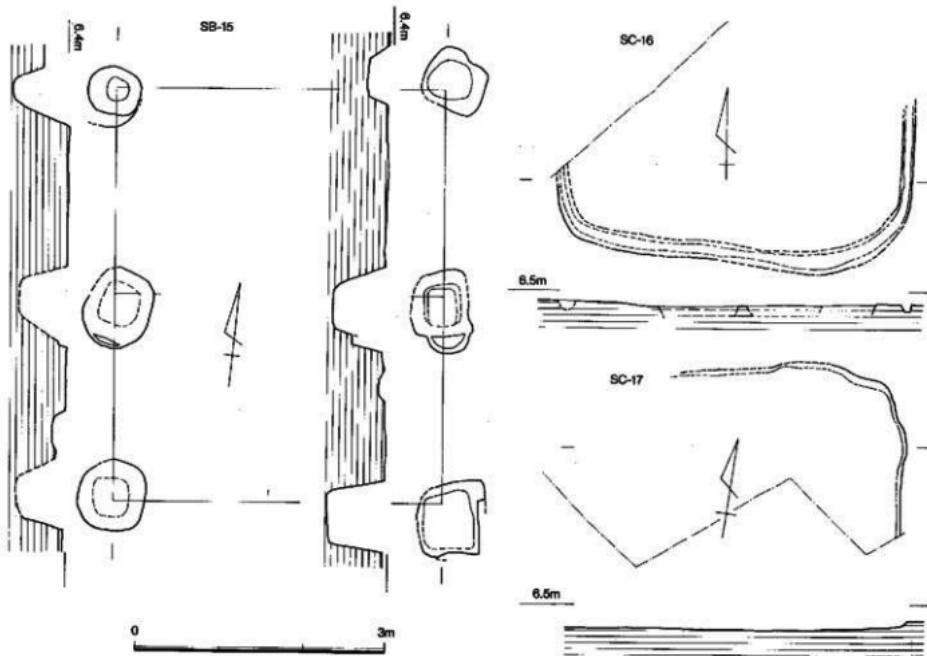


Fig.35 掘立柱建物SB15実測図（1/60）

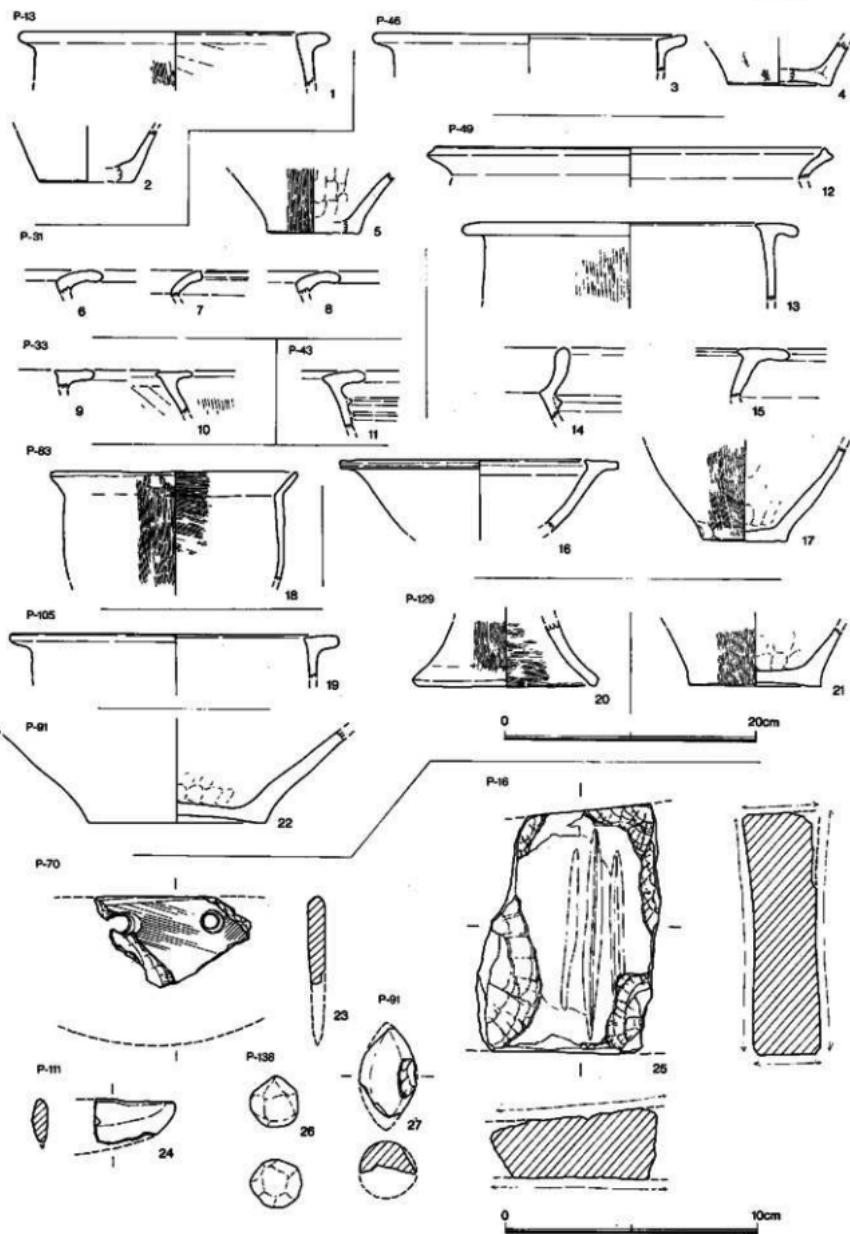


Fig.36 21次調査区出土遺物1 (1/2,1/4)

SD20 調査区西端で検出した。柱穴と切り合い断片的にとらえられる。東西方向に2.2mが遺存する。およそN-89°-E方向で、幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。竪穴式住居の壁溝の可能性がある。

SD21 調査区北西端で検出した。北端は調査区外に延び、柱穴と切り合い断片的にとらえられる。南北方向に3.4mが遺存する。およそN-45°-W方向で、幅0.2~0.1m、深さ0.1m以下を測る。竪穴式住居の壁溝の可能性がある。

#### 4.その他 (Fig.34・36・37)

詳細を報告した遺構以外に柱穴280余りを検出した。この中には柱痕を残すものもあったが、密集度合いが著しく建物などの復元は困難であった。柱穴掘り方や柱痕から遺物が出土した。遺物には土器、須恵器、土製品、石器などがある。上器には弥生時代中期中頃の壺(1・3・4・9・10・19)、高坏(16)、中期後半の壺(5・6・8・11~14・21)、壺(15,22)、鉢(2)、器台(20)、後期前半の壺(17)、後期後半(7・18)の壺などがある。壺のうち12は跳ね上がり口縁をもち、胎土からみて豊前地域からの搬入品と見られた。須恵器には古墳時代後期の坏類(28・30・31・35・36・39・41・42)、甕(40)赤焼け須恵器壺(37)、古代の坏類(29・32・33・38・43・44)、壺(34)がある。土製品には土玉(26)と投弾(27)がある。石器には石製穂端具(石包丁)(23)、砥石(25)などがある。なお、図化していないが、柱穴内から弥生時代の遺物と共に銅鋌1点と銅滓の付着した炉壁片十数点が出土している。

#### 3) 小結

21次調査では弥生時代中期から古代の遺構、遺物を検出した。出土遺構の傾向は隣接する15、53次調査区と共通するものであった。弥生時代には一貫して竪穴住居がなく、掘立柱建物主体の構成である。古墳時代後期には低地部の開削と並行して竪穴式住居が数棟建てられている。その後、遺物からみると、大きな断絶なく古代までこの地区が利用されていたと考えられる。

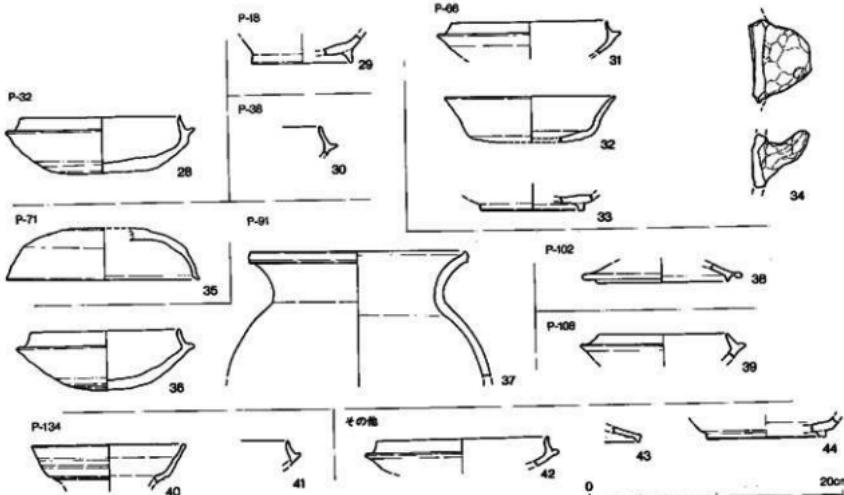


Fig.37 21次調査区出土遺物2 (1/4)

## 第5章 まとめ

比恵遺跡群第13,15,21次調査以降10数年が経過し、1999年までにおよそ66次に及ぶ調査が進められている。調査当時は不明であり、十分な理解ができなかった事項も次第に明らかとなりつつある。もちろん新たに提示された問題も少なくない。

ここでは、調査時点での2つの問題点についてその後の資料で補い、その意味について提示しまとめとしたい。第一に15次調査区で検出された弥生時代中期の大溝（SD05c）の構造と性格についてである。第二に13次調査区で検出された古墳時代後期の柵列をともなう大型建物の性格についてである。

### 1) 比恵遺跡群弥生時代中期後半の大溝について

弥生時代中期後半の遺構で注目されるのは第15次調査の大溝SD05cがある。この溝は検出面で幅2.5~3.0m、深さ約1.5mを測り、掘削当時は幅約5m、深さ約2.5mの規模であったと推定復元した。これは46次調査でこの大溝の延長を調査した大庭康時氏の推定値と一致する。溝下部には護岸保全の杭列が設けられ、當時流水があったと考えられた。この大溝の延長は比恵遺跡群内の35次、40次、41次、46次、53次において検出されている。46次調査では西から東へ伸びる溝が直角に振れ北方向に向かうことが確認されている。また、40次、58次、38次では再び北東方向に曲がっている。したがってこの



Fig.38 比恵遺跡群における大溝の位置 (1/1,000)

溝のラインは比恵丘陵を西から横切り、さらに丘陵上に幾つかの屈曲点をもち、全体として斜めに継ぐ全長900m以上の溝に復元される(Fig.38)。この大溝の掘削された目的については、調査担当者からは幾つかの説が示されている。40次調査を担当した田中寿太氏は大溝掘削段階は溝の西側に集落中心があり、その埋没後にこの溝を超えて集落が東に拡大したと見て、この大溝は丘陵縁辺に掘られた集落を巡る環濠の一部であると理解した。同様に50次調査担当の大庭泰時氏は、この大溝が丘陵縁辺でなく、丘陵の入り込む谷部中央に掘られている点を指摘し、そうした環濠との理解に注意を指摘している。ただし、大庭氏は46次調査の成果から溝底の帶水状態から防禦的色彩の強い「水濠」との理解を示した。このように、この大溝については環濠となるか否かの意見は分かれれるが、集落の防禦施設という理解で一致している。

では、こうした理解について検討する。15次調査では人溝に護岸杭列が見られ、溝の幅を維持し、流水や帶水への対策を行っている可能性を示した。また、35次や58次などの溝底には多くの木製品が出土した。こうした点から溝底は埋没当初から途絶えることなく帶水していたと考えられる。溝底のレベルを見ると46次で標高5.1m、15・53次付近で4.8m、58次で4.0mを測る。この3地点はそれぞれ約200m離れているが、北に向かって1.5~4%の傾斜で次第に下がっている。この数値は水を流す水路として機能したことを見ている。その場合に水は那珂川から取水し、比恵丘陵を斜めに横切り、御笠川方向へ流したことになる。このような水路は灌漑用水に類似するものである。しかし、1)溝の占有面積規模が大きく、2)当時の地表から水面まで落差が約2mに達する場所も想定され、3)溝底の幅が大きく、護岸施設などでそれを維持しようとしている点で溉漑用としては疑問が残る。周辺造構を見ると同時期の造構が大溝の両側に展開している。ただし溝に隣接する部分では掘立柱建物が主体となり、竪穴式住居跡は認められない。これらの建物は溝に並行、もしくは直行する場合が多く、何らかの関係があったと考えられる。また58次調査では大溝に引き込み部が検出されている(Fig.39)。この造構は下流に向かって開き、幅1.2~1.5m、奥行3.5mの規模である。これは停船施設と考えられる。こうした点から総合的に見て、この大溝を一義的には小船などの通行を目的としたいわば「運河」として設けられた施設と理解したい。(紙数の都合により各調査の報告書など参考文献は省いた。)

## 2) 比恵遺跡群古墳時代後期の官衙的造構について

第13次調査区で検出された掘立柱建物(SB101)は、1981年の第7次調査で検出された建物SB01と連続し、桁行9間、梁行2間の東西棟となる。また、東西両側に欄列と見られる布垣造構が連結し、建物と欄列でコ字形に区画されるという極めて特殊な施設に復元できた。構築時期は6世紀後半~7世紀前半の可能性が高い。欄列の類例は比恵遺跡群内や、市内有田遺跡群にもある。そこでは倉庫と見られる大型建物と並行して、あるいは隣接して設けられている。本例では建物と一体となって配列され、中央に空間を設けている。囲まれた範囲は東西約28m、南北16m以上ある。残念ながらその範囲のほとんどは調査区外にあり、内部の造構については不明である。建物と数列の欄列による区画という点では皇大神宮内宮正殿に類似している。この造構はこうした形態から祭儀的施設か、政庁的施設の機能を考えられる。推定される宣化元(536)年五月条の「修造官家那津口」記事との関連については、不明である建物と欄列の北半部分や、それにより区画された内部の調査を待ち、再検討したい。

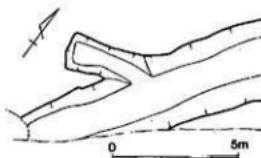


Fig.39 比恵遺跡群58次調査の  
「大溝」引き込み部(『561集』)

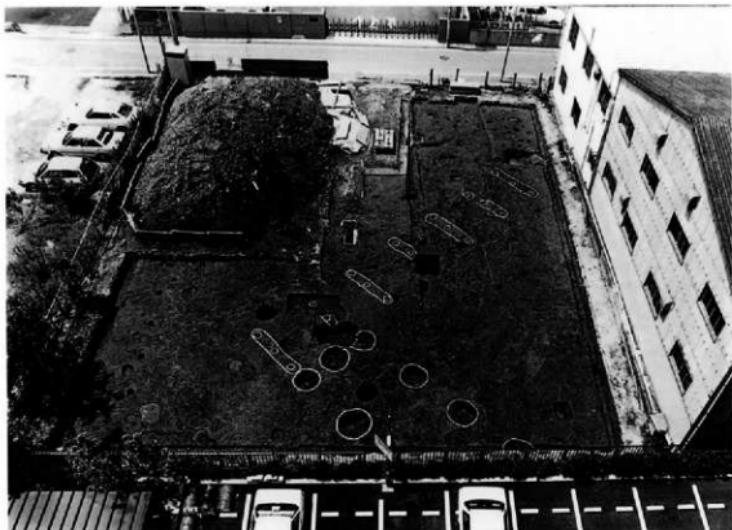
# 図 版



1.13次調査地点調査前風景（西より）



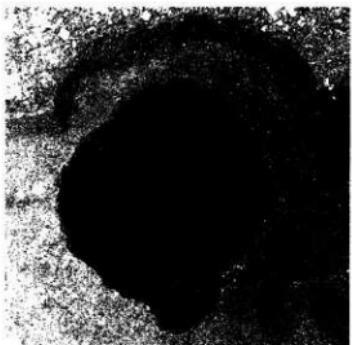
2.13次調査地点東側（1区）全景（南東より）



1.13次調査地点建物SB101、横列SA102検出状況（南東より）



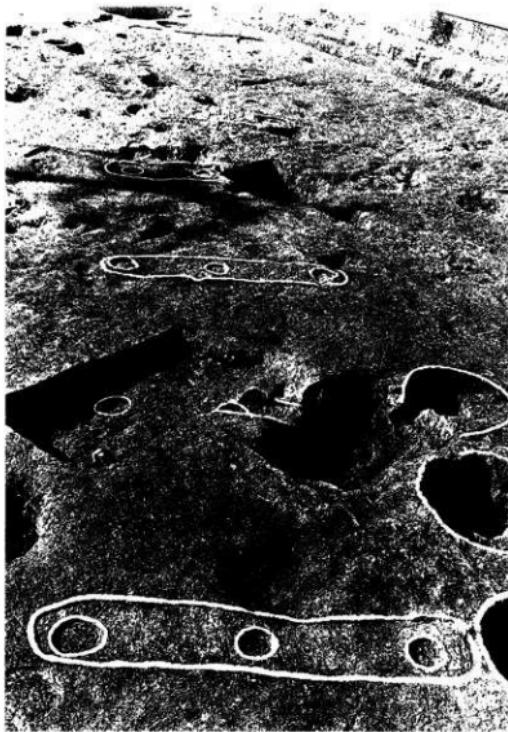
2.13次調査地点西側（2区）全景（南東より）



1.13次調査地点井戸SE016完掘状況（北西より）



2.13次調査地点溝SD205土層断面（東から）



3.13次調査地点柵列SA102全景（南から）



1.13次調査地点SB201柱穴064土層断面（西から）



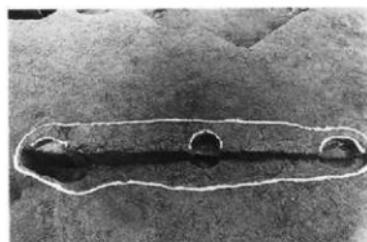
2.13次調査地点SB201柱穴074土層断面（西から）



3.13次調査地点SB201柱穴086土層断面（西から）



4.13次調査地点SB101柱穴140土層断面（北西から）



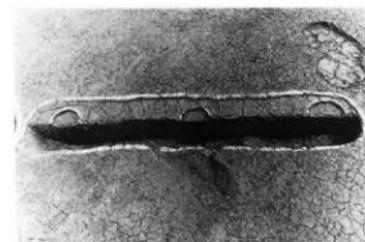
5.13次調査地点SA102柱穴033土層断面（北から）



6.13次調査地点SA102柱穴047土層断面（北から）



7.13次調査地点SA102柱穴060土層断面（北から）



8.13次調査地点SA102柱穴114土層断面（北から）



1.15次調査地点遠景（北東より）



2.15次調査地点近景（北東より）



1.15次調査地点建物SB12検出状況（北から）



2.15次調査地点建物SB14検出状況（南から）



3.15次調査地点建物SB13検出状況（南から）



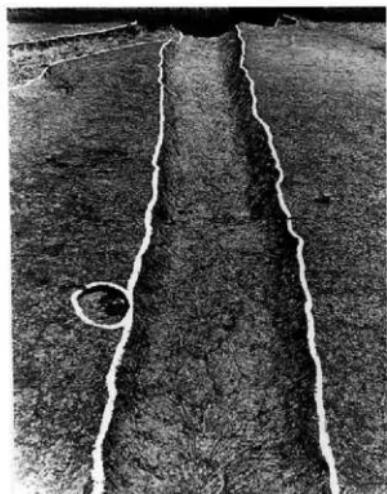
1.15次調査地点井戸SE11遺物出土状況（北から）



2.15次調査地点井戸SE11完掘状況（北から）



3.15次調査地点井戸SE10完掘状況（西から）



1.15次調査地点溝SD01完掘状況（北から）



2.15次調査地点溝SD02完掘状況（北から）



3.15次調査地点溝SD02～SD04完掘状況（北から）



4.15次調査地点溝SD06・SD07完掘状況（北から）



1.15次調査地点溝SD05完掘状況（南から）



2.15次調査地点溝SD05完掘状況（北から）



3.15次調査地点溝SD05土層断面（北から）



4.15次調査地点溝SD05遺物出土状況（東から）



5.15次調査地点溝SD05遺物出土状況（東から）



1.15次調査地点溝SD05調査風景（西から）



2.15次調査地点溝SD09土層断面（東から）

## 比恵遺跡群28

—比恵遺跡群第13次・第15次・第21次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第596集

1999年3月31日

発行：福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷：大同印刷株式会社

福岡市中央区今泉1丁目13番30号